
令和7年度
全国学力・学習状況調査

池田市結果報告

分析結果から見える成果と課題



令和7年10月
池田市教育委員会

はじめに

令和7年度全国学力・学習状況調査は、令和7年4月14日～4月17日に実施され、7月14日に国から結果が公表されました。

池田市では、子どもたちの豊かな学びを追究することをねらいとして、小中一貫教育や外国語教育の推進、各校の特色や課題に応じた実践研究に取り組む『『子どもの豊かな育ち』研究推進委託事業』など、様々な教育活動を展開してきました。

全国学力・学習状況調査についても、平成19年度以来、調査結果から池田市全体の傾向や各学校の状況を分析し、それまでの取組の成果と課題を明らかにするとともに、子どもたちの学力向上に向けた授業づくりに活用してまいりました。

各学校においては、この間、調査結果の分析をふまえ、学習指導要領に示された資質・能力を育むために、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に努め、学校教育における質の高い学びを実現できるよう、研究を進めているところです。

こうした取組のさらなる充実に向け、池田市教育委員会では、本年度も児童・生徒の調査結果を分析し、この報告書にまとめました。

本調査結果は、子どもたちの学力や学習状況、生活状況の一部を示すものであり、全てを表すものではありませんが、分析から明らかになった成果と課題をもとに、子どもたちが「わかる」と実感できる授業を一層推進していくとともに、今後の教育施策全般に活かしてまいります。

令和7年10月

池田市教育委員会

目 次

はじめに

| | | |
|-----|----------------------------|----|
| I | 結果概要 | 1 |
| II | 学力調査結果について | |
| 1 | 小学校 | |
| (1) | 小学校国語 結果分析と課題及び指導改善のポイント | 3 |
| (2) | 小学校国語 正答数分布グラフ及びレーダーチャート | 4 |
| (3) | 小学校国語 設問別結果概要 | 5 |
| (4) | 小学校算数 結果分析と課題及び指導改善のポイント | 6 |
| (5) | 小学校算数 正答数分布グラフ及びレーダーチャート | 7 |
| (6) | 小学校算数 設問別結果概要 | 8 |
| (7) | 小学校理科 結果分析と課題及び指導改善のポイント | 9 |
| (8) | 小学校理科 正答数分布グラフ及びレーダーチャート | 10 |
| (9) | 小学校理科 設問別結果概要 | 11 |
| 2 | 中学校 | |
| (1) | 中学校国語 結果分析と課題及び指導改善のポイント | 12 |
| (2) | 中学校国語 正答数分布グラフ及びレーダーチャート | 13 |
| (3) | 中学校国語 設問別結果概要 | 14 |
| (4) | 中学校数学 結果分析と課題及び指導改善のポイント | 15 |
| (5) | 中学校数学 正答数分布グラフ及びレーダーチャート | 16 |
| (6) | 中学校数学 設問別結果概要 | 17 |
| (7) | 中学校理科 結果分析と課題及び指導改善のポイント | 18 |
| (8) | 中学校理科 IRT バンド分布表及びレーダーチャート | 19 |
| (9) | 中学校理科 設問別結果概要 | 20 |
| III | 質問紙調査結果について | |
| 1 | 小学校 児童質問紙調査結果概要 | 22 |
| 2 | 中学校 生徒質問紙調査結果概要 | 24 |
| IV | 質問紙調査回答結果集計 | |
| 1 | 小学校 児童質問紙調査回答結果集計 | 26 |
| 2 | 中学校 生徒質問紙調査回答結果集計 | 69 |

I 結果概要

1 平均正答率の状況

【小学校・義務教育学校(前期課程)】

| 教科 | 池田市 (正答率) | 大阪府 (正答率) | 全国 (正答率) | 池田市 (全国比) |
|----|--------------|--------------|-------------|--------------|
| 国語 | 69.6 | 65.5 | 66.8 | 1.04 |
| 算数 | 59.3 | 57.5 | 58.0 | 1.02 |
| 理科 | 57.7 | 54.5 | 57.1 | 1.01 |

【中学校・義務教育学校(後期課程)】

| 教科 | 池田市 (正答率) | 大阪府 (正答率) | 全国 (正答率) | 池田市 (全国比) |
|----|--------------|--------------|-------------|--------------|
| 国語 | 55.9 | 52.4 | 54.3 | 1.03 |
| 数学 | 54.4 | 46.7 | 48.3 | 1.13 |
| 理科 | 53.8 | 49.0 | 51.5 | 1.04 |

小学校調査は国語・算数・理科、中学校調査は、国語・数学・理科を行い、調査問題では、下記①と②を一体的に問う。

- ①身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
- ②知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等に関わる内容

【補足】

本調査の中学校理科においては、*IRT を導入した*CBT 調査となっており、他の教科のように正答数分布表での記載がないため、*IRT バンドを活用。

令和8年度は、中学校英語科のみ、CBT 調査を実施。

令和9年度以降、小中学校調査の全教科において、CBT 調査を実施予定。

<*IRT>

Item Response Theory の略。反応項目理論とも言う。IRT とは児童生徒の正答・誤答が、問題の特性（難易度、測定精度）によるのか、児童生徒の学力によるのかを区別して分析し、児童生徒の学力スコアを推定する統計理論のこと。IRT は、TOEIC・TOEFL 等の英語資格・検定試験、医療系大学間共用試験等で採用されており、異なる問題から構成される試験・調査の結果を、同じものさし（尺度）で比較することができる。

<*CBT>

Computer-based Testing の略。一人一台端末を活用したコンピュータ使用型調査。

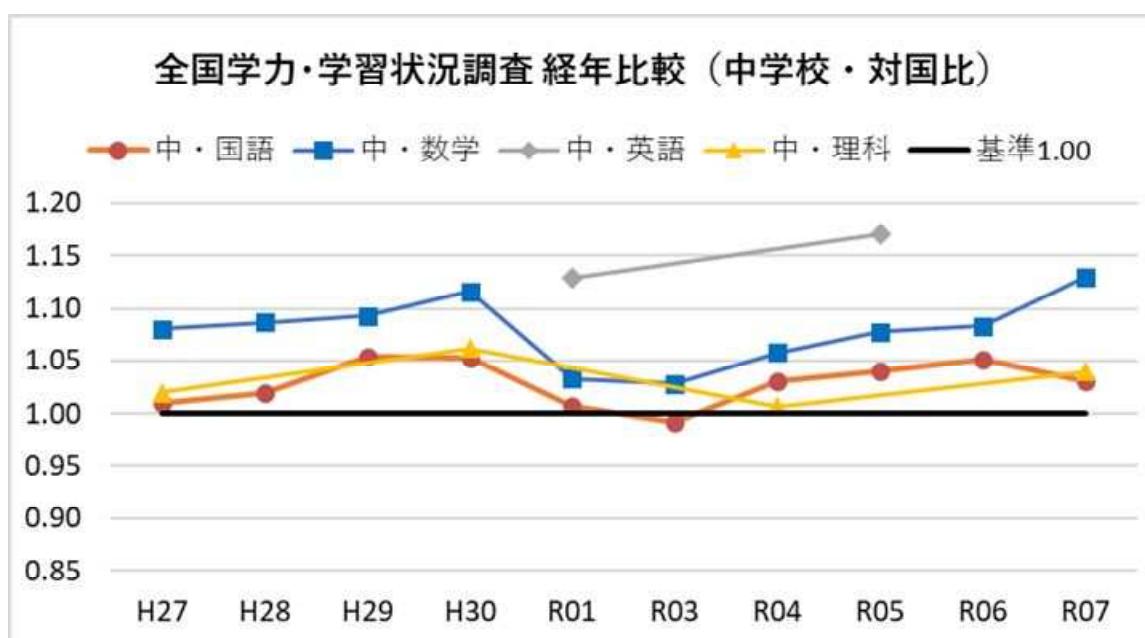
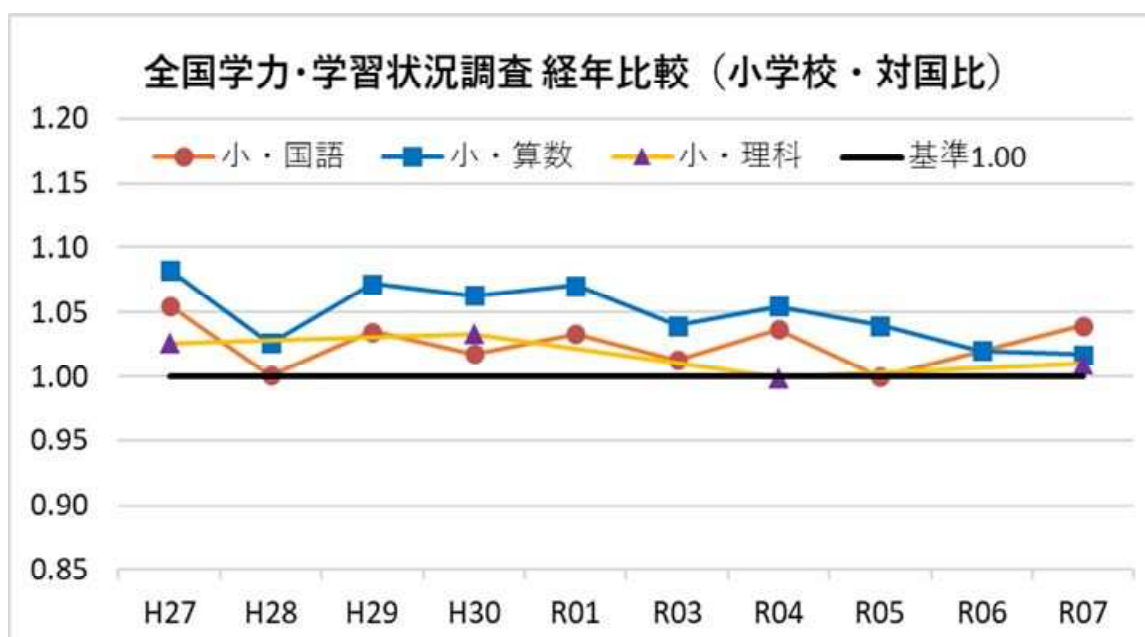
<*IRT バンド>

IRT スコア（IRT に基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500 を基準にした得点で表すもの。）を1～5の段階に区切ったもの。3を基準のバンドとし、5が最も高いバンドとなる。IRT バンドで表示するのは、IRT 分析の精度も踏まえ、細かな差異に捉われすぎることなく、全体の課題把握と指導改善に生かすことを趣旨としている。

2 対全国比経年比較

小学校調査では、全教科が全国の平均正答率を継続して上回っている。一方、経年比較でみると、算数科は下降傾向にあり、改善が必要である。

中学校調査では、数学科の平均正答率が上昇しており、改善傾向にある。一方、経年比較でみると、国語科と理科は横ばいで、改善が必要である。



Ⅱ 学力調査結果について

1 小学校

(1) 小学校国語 結果分析と課題及び指導改善のポイント

小学校国語の平均正答率は 69.6%（全国：66.8%）であり、概ね良好な結果である。また、問題形式別の平均正答率でみても、選択式、短答式、記述式すべてにおいて、全国を上回っている。ここ数年、記述式については全国を下回る結果が続いており、課題であったが、改善の傾向がみられる結果となった。

以下、記述式の特徴的な設問について、具体的に示す。

| 問題形式 | 本市平均正答率 | 全国平均正答率 |
|------|---------|---------|
| 選択式 | 68.0% | 64.7% |
| 短答式 | 80.7% | 78.5% |
| 記述式 | 60.4% | 58.8% |

【設問 2 三について】

出題の趣旨

目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができるかどうかをみる。

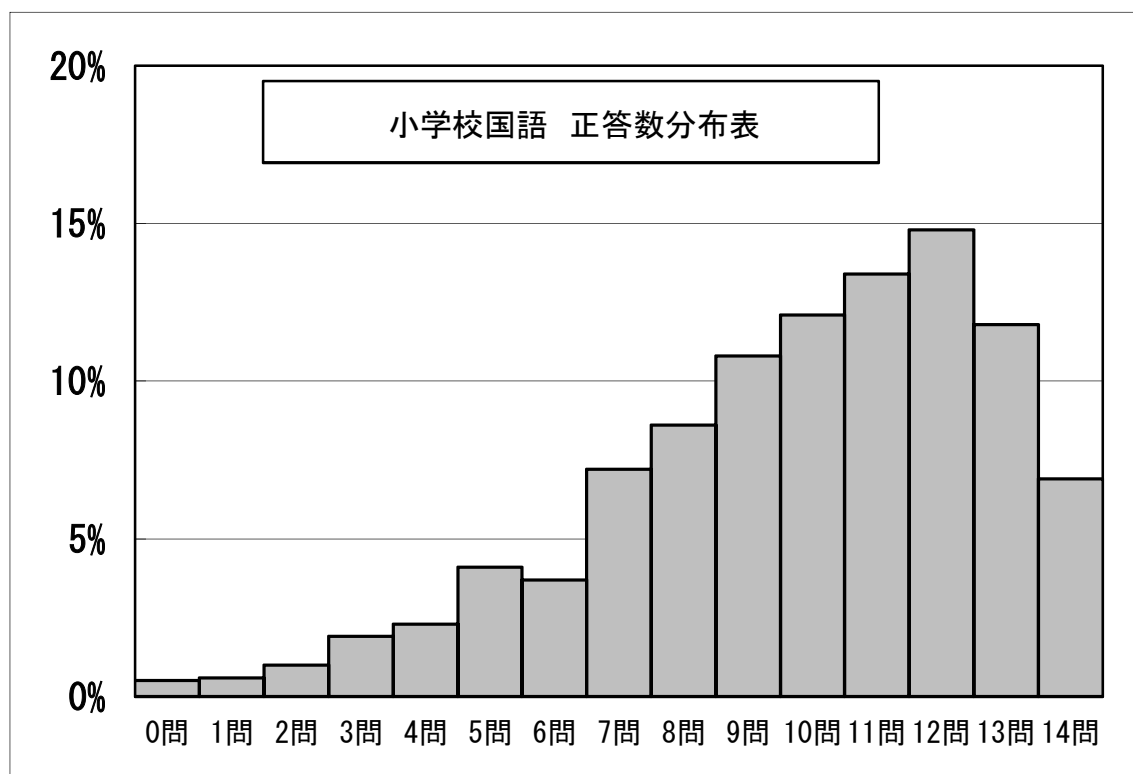
本設問では、調べたことのメモを適切に活用し、目的に応じて自分の考えを詳しく書くことができるかが問われた。本市の正答率は 62.7%（全国：61.3%）で、全国の前年を上回っており、昨年度の類題と比較すると改善傾向がみられる。

解答類型ごとの反応率をみると、調べたことのメモについて、「使ってみて分かったこと」からは言葉を取り上げて書けている一方で、「本を読んで分かったこと」からは適切に言葉を取り上げられない誤答が多くみられた。このような解答をした児童は、メモを十分に活用できず、使ってみた感想・意見と、本から分かる事実とを区別して書くことができていないと考えられる。

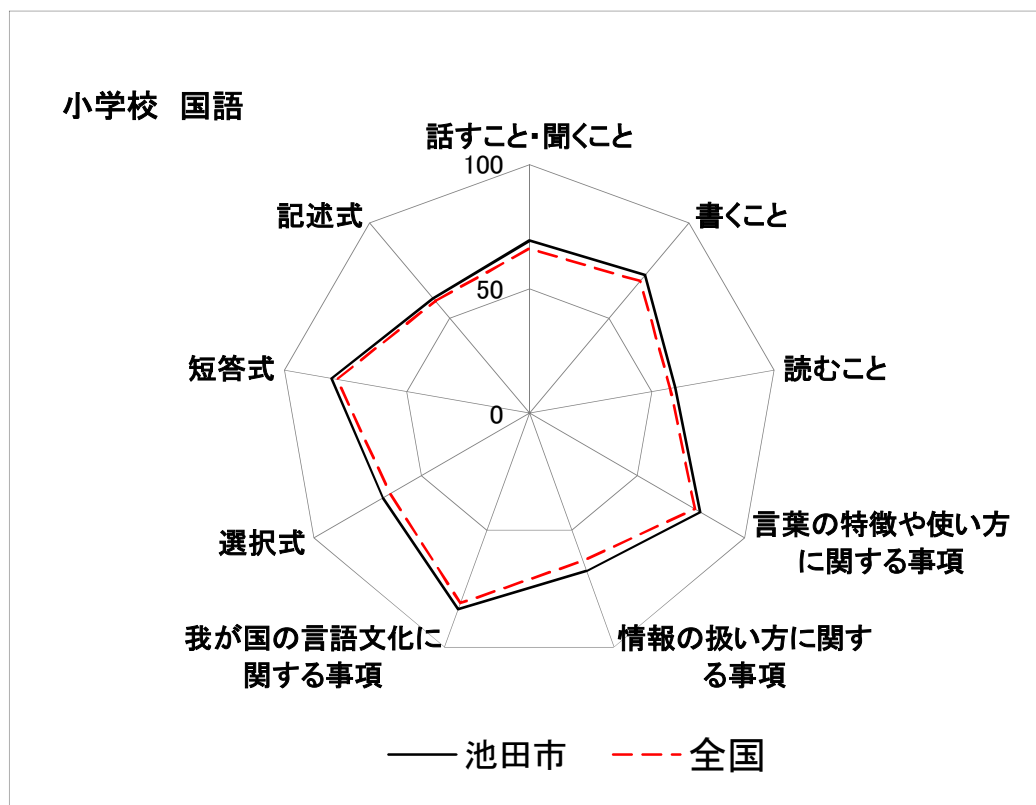
同様の傾向は昨年度の類題からも確認されており、本市の国語教育における課題といえる。事実と感想・意見とを区別して書くためには、事実を客観的に表現すること、その事実と自分の考えや感想との関係を正しく捉えることが重要である。

そのための指導としては、メモ段階から「本からわかったこと（事実）」と「使ってみてわかったこと（感想）」を色分けして整理したり、児童同士で事実か意見かを確かめ合う活動を設定したりすることが有効である。さらに、書き表し方を工夫する力を養うために、目的や意図に応じて、自分の考えを簡単に書いたり、詳しく書いたりする練習を授業で取り入れるなど、指導の工夫が必要である。こうした学習活動を通して、児童自身が学習の意義や価値を実感できるようにするとともに、話し合い活動や書く活動を効果的に取り入れることで、自ら学びに向かう姿勢を育み、言葉の力を高めていくことが大切である。

(2)小学校国語 正答数分布グラフ及びレーダーチャート
正答数分布グラフ(横軸:正答数、縦軸:割合)



領域・観点・問題形式別 レーダーチャート



(3) 小学校国語科設問別結果概要

| 設問番号 | 設問の概要 | 出題の趣旨 | 領域 | 正答率(%) | | | 無解答率(%) | | | 結果概要 |
|-------|---|--|--------------|--------|---------|--------|---------|---------|--------|---|
| | | | | 池田市 | 大阪府(公立) | 全国(公立) | 池田市 | 大阪府(公立) | 全国(公立) | |
| 1ー | 【話し合いの様子】における小森さんの傍線部の発言を説明したものとして適切なものを選択する | 目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討することができるかどうかをみる | 話すこと 聞くこと | 56.4 | 52.0 | 53.3 | 0.5 | 0.6 | 0.5 | 正答率が全国を上回っているが、正答率が低く、目的や意図に応じて、話し合いから情報を分類したり関係付けたりする力に課題がみられる。 |
| 1二 | 【話し合いの記録】の書き表し方を説明したものとして適切なものを選択する | 情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解使用することができるかどうかをみる | 言語事項 | 67.4 | 61.5 | 63.1 | 0.5 | 0.5 | 0.5 | 正答率が全国を4.3ポイント上回っており、図などの情報から書き表し方の特徴を正確に捉える力がついていると考えられる。 |
| 1三(1) | 【インタビューの様子の一部】で小森さんが傍線部Aのように発言した目的として適切なものを選択する | 自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉えることができるかどうかをみる | 話すこと 聞くこと | 72.8 | 69.9 | 71.8 | 0.5 | 0.6 | 0.6 | 正答率が全国をやや上回っており、自分の意図に応じて話の内容を正確に捉えることができていると考えられる。 |
| 1三(2) | 【インタビューの様子の一部】で小森さんが傍線部Bのように発言した理由として適切なものを選択する | 話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめることができるかどうかをみる | 話すこと 聞くこと | 79.2 | 73.2 | 73.7 | 0.4 | 0.6 | 0.6 | 正答率が全国を有意に上回っていることから、話し手の考えと自らの考えを比較しながら、発言の意図を正確に捉えることができていると考えられる。 |
| 2ー | 【ちらし】の文章の構成の工夫を説明したものとして適切なものを選択する | 書く内容の中心を明確にし、内容のまとまりで段落をつくったり、段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考えることができるかどうかをみる | 書くこと | 70.8 | 63.3 | 65.5 | 1.2 | 0.9 | 0.8 | 正答率が全国を有意に上回っていることから、文章の構成の工夫を正確に捉える力が身についていると考えられる。 |
| 2二 | 山田さんが手ぬぐいの模様について言葉と図で説明した理由として適切なものを選択する | 図表などを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができるかどうかをみる | 書くこと | 84.2 | 80.3 | 81.8 | 1.3 | 0.9 | 0.8 | 正答率が全国を上回っていることから、図と言葉による説明との関係性を正確に捉えながら、書き表し方を工夫する力が一定身についているものと考えられる。 |
| 2三 | 【ちらし】の二重傍線部を、【調べたこと】を基に詳しく書く | 目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができるかどうかをみる | 書くこと | 62.7 | 57.7 | 61.3 | 4.4 | 5.4 | 5.0 | 正答率が全国をやや上回っており、目的に応じて自分の考えを的確に記述する力がついてきている。無解答も一定おり、書き表し方を工夫する活動を授業で積極的に取り入れる必要がある。 |
| 2四ア | 【ちらし】の下線部Aを、漢字を使って書き直す(このみ) | 学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使うことができるかどうかをみる | 言語事項 | 83.1 | 82.1 | 81.6 | 6.9 | 6.9 | 7.2 | 正答率が全国を上回っているが、本市の正答率が必ずしも高水準にあるわけではなく、約2～3割の児童については、既習の漢字の定着に一定の課題があることがうかがえる。 |
| 2四イ | 【ちらし】の下線部Bを、漢字を使って書き直す(あついで) | | 言語事項 | 75.4 | 71.9 | 72.1 | 4.1 | 4.2 | 4.3 | |
| 3ー | 【資料1】を読んで思い出した【木村さんの経験】を通して、木村さんが気付いたこととして適切なものを選択する | 時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付くことができるかどうかをみる | 言語事項 | 83.7 | 80.3 | 81.2 | 2.1 | 1.5 | 1.3 | 正答率は83.7%と高く、全国を上回っており、資料と経験を結び付けて捉え、言葉の違いに気づくことができていると考えられる。 |
| 3二(1) | 【木村さんのメモ】の空欄Aに入る適切な言葉を【資料2】の中から書き抜く | 時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えることができるかどうかをみる | 読むこと | 83.4 | 80.5 | 81.6 | 3.5 | 3.2 | 2.9 | 正答率は83.4%と高く、全国を上回っており、時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉える力が定着していると考えられる。 |
| 3二(2) | 【資料3】を読み、【木村さんのメモ】の空欄Bに当てはまる内容として適切なものを選択する | 事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握することができるかどうかをみる | 読むこと | 54.4 | 49.4 | 51.3 | 3.5 | 2.5 | 2.4 | 正答率が全国を上回る結果ではあるが、資料から文章全体の構成を捉え要旨を把握する力に課題がみられる。 |
| 3三(1) | 【話し合いの様子】の田中さんの発言の空欄Aに当てはまる内容として適切なものを選択する | 目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることができるかどうかをみる | 読むこと | 42.9 | 40.7 | 40.8 | 4.8 | 3.5 | 3.4 | 正答率が最も低く、目的に応じて、複数の資料を関連付けて、必要な情報を見つける力に課題がみられる。 |
| 3三(2) | 【資料1】を読み返して言葉の変化について自分が納得したことを、【資料2】、【資料3】、【資料4】に書かれていることを理由にしてまとめて書く | 目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることができるかどうかをみる | 読むこと | 58.2 | 53.6 | 56.3 | 15.3 | 16.5 | 16.2 | 正答率が低いうえに、無解答率も最も高い。複数の資料から、目的に応じて必要な情報を見つけ、その情報を適切に活用しながら文章を書くことに課題がみられる。 |

（４）小学校算数 結果分析と課題及び指導改善のポイント

本市における小学校算数の正答数分布は、平均正答数 16 問中 9.5 問、中央値は 10 問となっており、平均値より若干高い正答率の層が多くなっている。平均正答率は 59.3%（全国：58%）で、全国を 1.3 ポイント上回っており、概ね良好な結果である。

一方、全国と同様に本市においても記述式における課題が顕著に見られた。以下、顕著な課題が表れた設問について、具体的に示す。

【設問番号 2（４）について】

出題の趣旨

基本的図形に分類することができる図形の面積の求め方を、式や言葉を用いて記述できるかどうかをみる。

本設問の正答率は 35.7%（全国：37%）で、全国より 1.3 ポイント下回っている。

基本図形に分割することができる図形の面積の求め方を、式や言葉を用いて記述する設問であり、五角形の面積を求めるために既習の求積可能な二つの図形を見だし、面積の求め方について筋道立てて考察することが必要である。

解答類型ごとの反応率をみると、三角形の面積を求める式や言葉は記述できているが、台形の面積を求める式や言葉が記述できていないことがわかる。また、設問番号 2（２）で 5 つの図形の中から台形を選ぶ問題においても、53.6% が誤答となっており、台形の意味や性質についての理解に課題があると考えられる。日々の学習指導の中で、図形を構成する要素とその関係に着目して図形を見いだす活動や、構成要素をもとに図形を弁別したり根拠を明らかにして記述したりする学習の充実を図る必要がある。

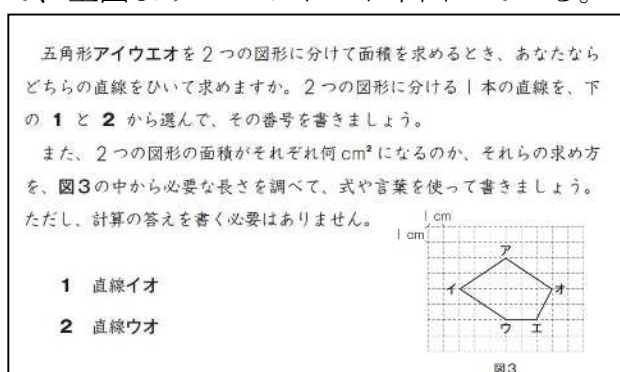
【設問番号 3（２）】

出題の趣旨

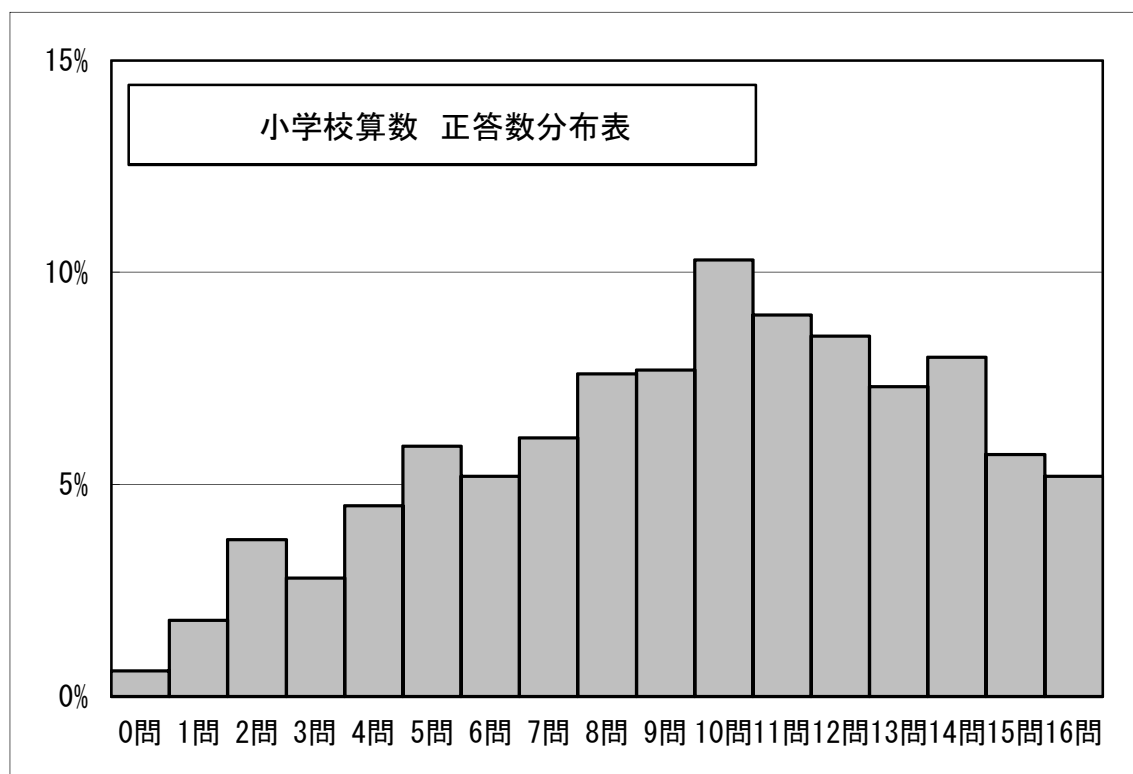
分数の加法について、共通する単位分数を見だし、加数と被加数が、共通する単位分数の幾つ分かを数や言葉を用いて記述できるかどうかをみる。

本設問の正答率は 24.5%（全国：23%）で、正答率が最も低い設問である。解答類型をみると、それぞれに共通する単位分数を見いだすことはできているが、 $\frac{3}{4}$ と $\frac{2}{3}$ が共通する単位分数の幾つ分かを理解できていない児童が多い。また、 $\frac{3}{4}$ と $\frac{2}{3}$ の両方について、単位分数は幾つ分かを表す数や言葉を書けていない児童が多い。

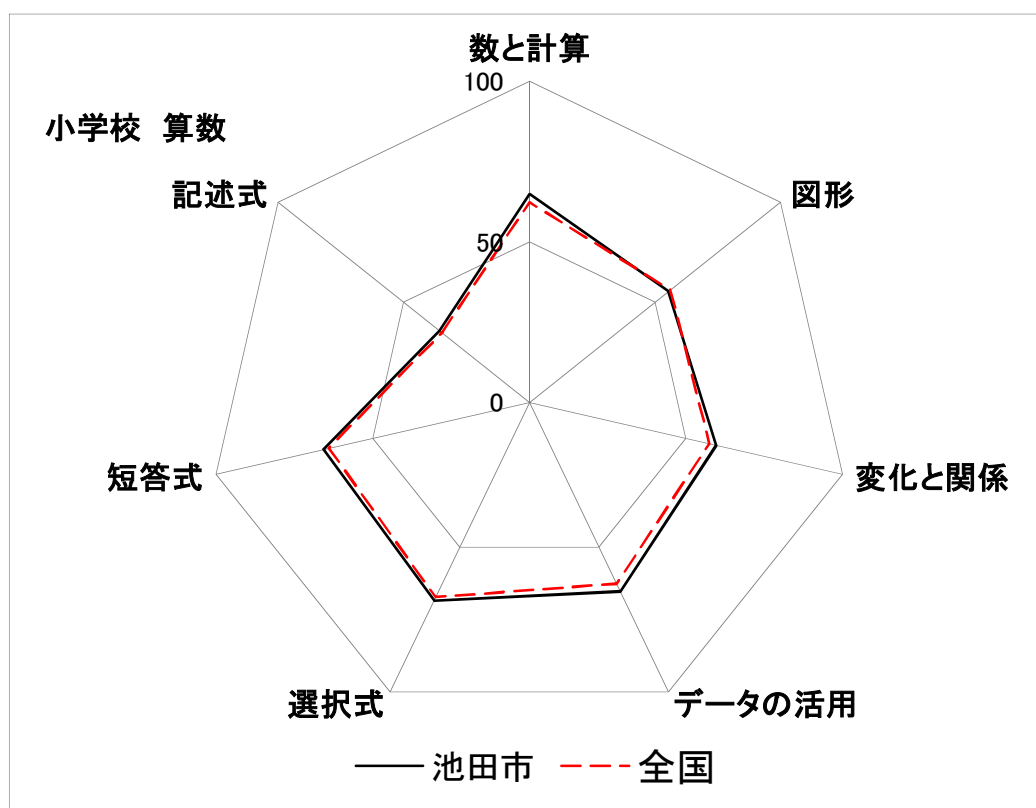
計算指導を行う際に、計算方法や答えの求め方を指導することばかりに注視するのではなく、そこに含まれた数学的なアイデアに気づいたり、よさを感じたりすることができるよう、数の表し方の仕組みや数を構成する単位に着目しながら、計算の仕方について統合的・発展的に考察し、記述することができるよう指導していくことが重要である。



(5)小学校算数 正答数分布グラフ及びレーダーチャート
正答数分布グラフ(横軸:正答数、縦軸:割合)



領域・観点・問題形式別 レーダーチャート



(6) 小学校算数科設問別結果概要

| 設問 番号 | 設問の概要 | 出題の趣旨 | 領域 | 正答率 (%) | | | 無解答率 (%) | | | 結果概要 |
|----------|--|--|-------------------------------|-------------|-------------------------|--------------------|-------------|-------------------------|--------------------|---|
| | | | | 池 田 市 | 大 阪 府 (公 立) | 全 国 (公 立) | 池 田 市 | 大 阪 府 (公 立) | 全 国 (公 立) | |
| 1 (1) | 2022年の全国のブロックリーの出荷量が2002年の全国のブロックリーの出荷量の約何倍かを、棒グラフから読み取って選ぶ | 棒グラフから、項目間の関係を読み取ることができるかどうかをみる | 数と計算 データの活用 | 82.1 | 78.7 | 78.7 | 0.3 | 0.4 | 0.4 | 全国を上回る高い正答率で、棒グラフから項目間の関係を読み取る力が一定ついていると考えられる。 |
| 1 (2) | 都道府県Aのブロックリーの出荷量が増えたかどうかを調べるために、適切なグラフを選び、出荷量の増減を判断し、そのわけを書く | 目的に応じて適切なグラフを選択して出荷量の増減を判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できるかどうかをみる | データの活用 | 32.2 | 28.6 | 31.0 | 0.6 | 0.9 | 0.9 | 全国を上回っているが正答率が低く、データを読み取り、必要な事項に着目して記述することに課題がみられる。 |
| 1 (3) | 示された表から、「春だいこん」や「秋冬だいこん」より「夏だいこん」の出荷量が多い都道府県を選ぶ | 簡単な二次元の表から、条件に合った項目を選ぶことができるかどうかをみる | データの活用 | 74.1 | 69.6 | 71.6 | 3.9 | 4.1 | 3.5 | 無解答が一定数あり、算数以外の教科でも、簡単な二次元の表を正確に読み取る活動や、分類整理する活動を積み重ねていくことが必要である。 |
| 1 (4) | 示された資料から、必要な情報を選び、ピーマン1個とブロック4個の重さを求める式と答えを書く | 示された資料から、必要な情報を選び、数量の関係を式に表し、計算することができるかどうかをみる | 数と計算 | 76.9 | 74.4 | 74.5 | 1.8 | 2.7 | 2.6 | 正答率は全国をやや上回り、必要な情報を選び、数量の関係を式に表したり、計算したりする力は概ねついていると考えられる。 |
| 2 (1) | 示された平行四辺形をかくために、コンパスの開く長さを書き、コンパスの針を刺す場所を選ぶ | 平行四辺形の性質を基に、コンパスを用いて平行四辺形を作図することができるかどうかをみる | 図形 | 59.9 | 57.6 | 58.3 | 0.9 | 1.2 | 1.2 | 平行四辺形の特徴に課題がみられる。平行四辺形の性質を基に、辺の長さや角の大きさ、辺の位置関係に着目して作図する活動を充実させる必要がある。 |
| 2 (2) | 方眼上の五つの図形の中から、台形を選ぶ | 台形の意味や性質について理解しているかどうかをみる | 図形 | 46.4 | 50.4 | 50.2 | 0.5 | 0.7 | 0.7 | 誤答が多く、台形の意味や性質の理解に課題がみられる。辺の長さや角の大きさ、辺の位置関係に着目して、図形を弁別する活動を充実させる必要がある。 |
| 2 (3) | 角をつくる二つの辺をそれぞれのばした図形の角の大きさについてわかることを選ぶ | 角の大きさについて理解しているかどうかをみる | 図形 | 80.0 | 78.4 | 79.3 | 0.6 | 1.0 | 1.0 | 正答率が高く、角の大きさについては、概ね理解できていると考えられる。 |
| 2 (4) | 五角形の面積を求めるために五角形を二つの図形に分割し、それぞれの図形の面積の求め方を書く | 基本図形に分割することができる図形の面積の求め方を、式や言葉を用いて記述できるかどうかをみる | 図形 | 35.7 | 36.6 | 37.0 | 2.2 | 2.7 | 2.7 | 正答率が低く、記述に課題がみられる。算数以外の教科でも、筋道を立てて自らの考えを記述する活動を充実させていく必要がある。 |
| 3 (1) | 0.4 + 0.05について、整数の加法で考えるときの共通する単位を書く | 小数の加法について、数の相対的な大きさを、共通する単位で捉えることができるかどうかをみる | 数と計算 | 76.7 | 73.8 | 74.1 | 2.4 | 3.0 | 2.8 | 正答率が全国を上回っており、小数の加法については、共通する単位を捉えることができていると考えられる。 |
| 3 (2) | 3/4 + 2/3について、共通する単位分数と、3/4と2/3が、共通する単位分数の幾つ分になるかを書く | 分数の加法について、共通する単位分数を見だし、加数と被加数が、共通する単位分数の幾つ分かを数や言葉を用いて記述できるかどうかをみる | 数と計算 | 24.5 | 23.5 | 23.0 | 13.9 | 15.4 | 15.7 | 正答率が低く誤答も多い。解答類型をみると、共通する単位分数は見だすことができているが、共通する単位分数の幾つ分かを理解できていない解答が多くみられる。 |
| 3 (3) | 数直線上に示された数を分数で書く | 数直線上で、1の目盛りに着目し、分数を単位分数の幾つ分として捉えることができるかどうかをみる | 数と計算 | 37.4 | 35.4 | 35.0 | 7.5 | 7.9 | 7.8 | 正答率が低く、数直線上で1の目盛りに着目し、分数を単位分数の幾つ分として捉えることに課題がみられる。 |
| 3 (4) | 1/2 + 1/3を計算する | 異分母の分数の加法の計算をすることができるかどうかをみる | 数と計算 | 84.0 | 82.5 | 81.3 | 3.6 | 4.2 | 4.1 | 正答率が高く全国を上回っており、異分母の分数の加法の計算については概ね理解できていると考えられる。 |
| 4 (1) | 新品のハンドソープが空になるまでに何プッシュすることができるのかを調べるために、必要な事柄を選ぶ | 伴って変わる二つの数量の関係に着目し、必要な数量を見いだすことができるかどうかをみる | 数と計算 変化と関係 データの活用 | 87.0 | 82.1 | 82.8 | 2.6 | 2.6 | 2.6 | 正答率が高く全国を上回っており、伴って変わる二つの数量の関係に着目し、必要な数量を見いだすことができていると考えられる。 |
| 4 (2) | 使いかけのハンドソープがあつて何プッシュすることができるのかを調べるために、必要な事柄を判断し、求め方を書く | 伴って変わる二つの数量の関係に着目し、問題を解決するために必要な数量を見だし、知りたい数量の大きさの求め方を式や言葉を用いて記述できるかどうかをみる | 数と計算 測定 変化と関係 データの活用 | 51.0 | 48.4 | 48.7 | 4.1 | 3.6 | 3.4 | 誤答が多く、問題場面の数量の関係に着目し、計算に関して成り立つ性質を活用して、二つの事柄を書くことに課題がみられる。 |
| 4 (3) | はかりが示された場面で、はかりの目盛りを読む | はかりの目盛りを読むことができるかどうかをみる | 測定 | 59.5 | 59.2 | 60.9 | 4.6 | 4.4 | 4.2 | 解答類型をみると、はかりの最小目盛りの大きさに着目することができていない児童が多いと考えられる。 |
| 4 (4) | 10%増量したつめかえ用のハンドソープの内容量が、増量前の何倍かを選ぶ | 「10%増量」の意味を解釈、「増量後の量」が「増量前の量」の何倍になっているかを表すことができるかどうかをみる | 変化と関係 | 41.0 | 41.5 | 40.9 | 4.9 | 4.2 | 4.1 | 正答率が低く、「10%増量」の意味は解釈できているが、「増量後の量」が「増量前の量」の何倍になっているかを理解できておらず、課題がみられる。 |

（７）小学校理科結果分析と課題及び指導改善のポイント

小学校理科全体の平均正答率は 57.7%であり、全国平均をやや上回った。領域ごとに比べると「粒子」領域、「地球」領域では全国平均を上回ったが、「エネルギー」領域、「生命」領域では下回った。

「エネルギー」領域では、4 問中 3 問で正答率が全国平均を上回り、概ね良好な結果と言えるが、乾電池の直列つなぎに関する問題で全国平均を 5.9 ポイント下回った。つなぎ方の違いを体験的に理解できる実験を繰り返したり、基本的な用語やつなぎ方について図で整理したりする活動を取り入れ、基礎的な知識・技能のより確かな定着を図る必要がある。

「粒子」領域では、対象 6 問全てにおいて全国平均を上回った。特に、水の温まり方について何を調べる必要があるかを書く問題では、全国平均を 4 ポイント上回っており、問題を解決するための観察・実験方法が適切であったかを検討し、表現する力が身についていると考えられる。一方で、無解答率が 6.1%となっており、個々の児童への丁寧な指導が必要である。

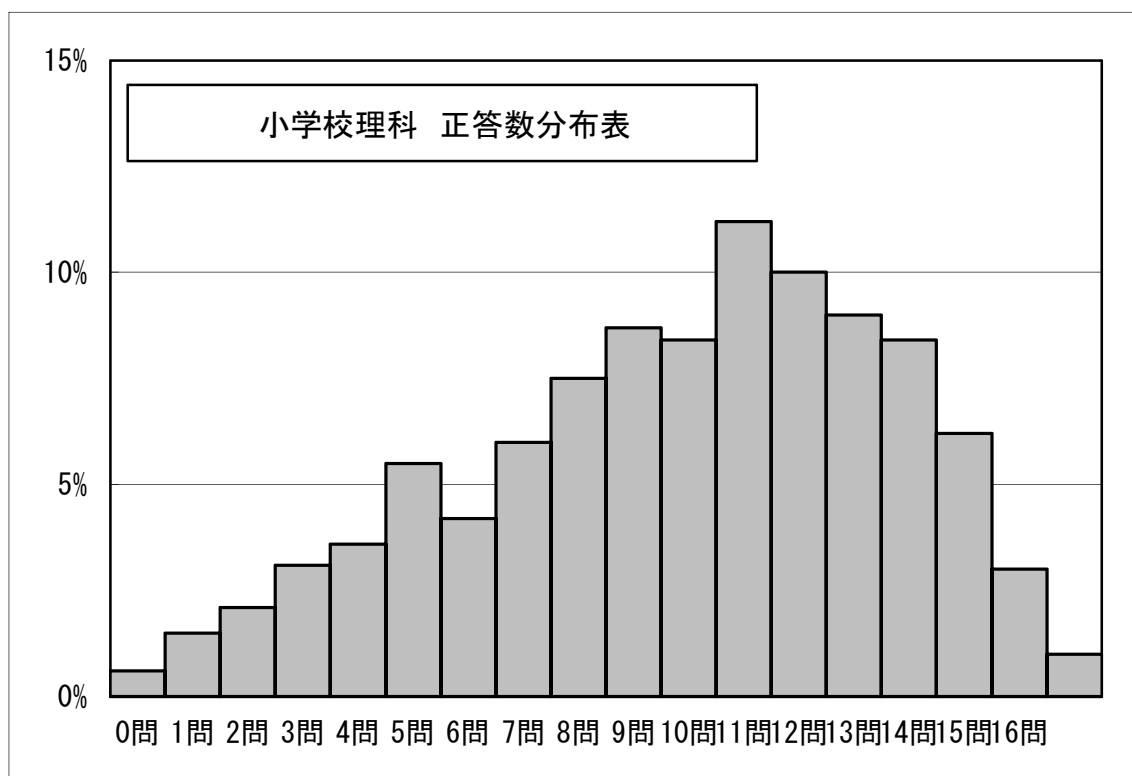
「生命」領域では、4 問中 3 問で全国平均を下回り、基礎的な知識・技能についてここでも課題がみられた。しかし、レタスの種子の発芽の条件について記述する問題については、正答率は低いものの、全国平均を 6.1 ポイント上回っており、考察やふりかえり等で自分の考えを記述することを意識した授業づくりの成果であると考えられる。

「地球」領域では、6 問中 5 問で全国平均を上回り、水の蒸発や結露、温度による状態の変化など、知識や概念についての理解が定着していると考えられる。

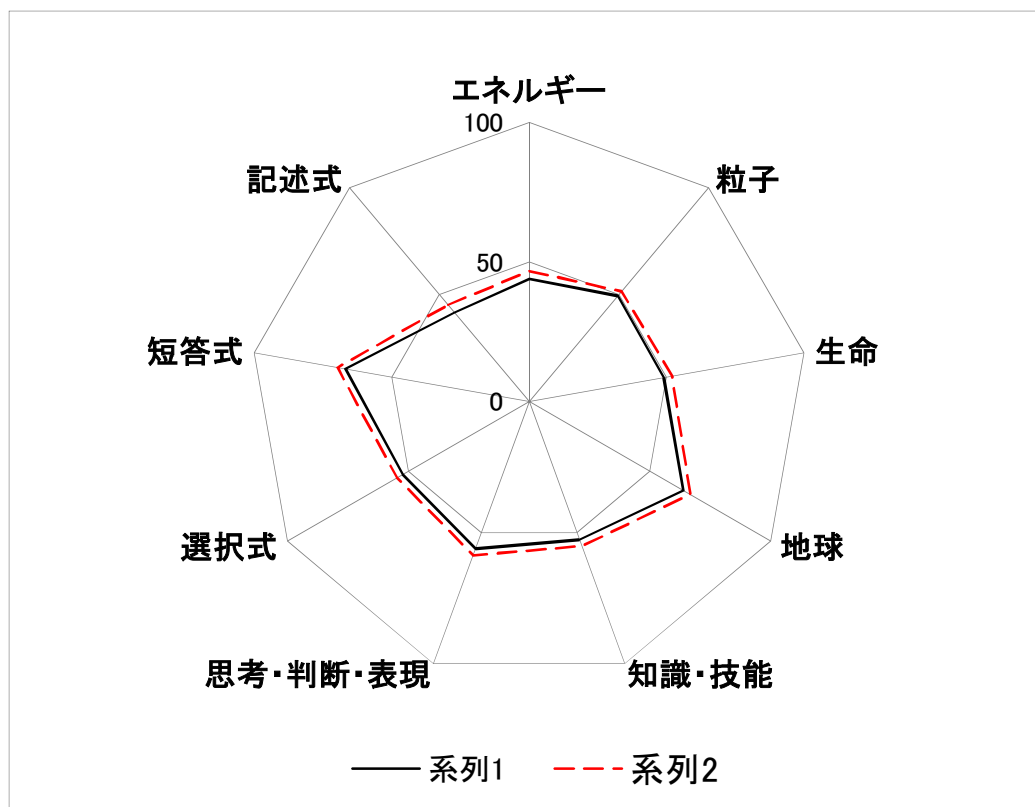
観点別の平均正答率でみると、「思考・判断・表現」では全国平均を上回る一方で、「知識・技能」ではやや下回る結果となった。普段の授業において基本概念や理科的な用語を繰り返し確認し、観察・実験の活動と結び付けて理解させることが必要である。その上で「思考・判断・表現」とつながるよう、知識を使って説明したり記述したりする活動を意図的に設定することが効果的である。

また、令和 4 年度の前回調査と比べると、平均正答率が改善し、無解答率が減少した。しかし、児童質問紙の「理科の学習が将来、社会に出たときに役に立つか」や「理科の学習が普段の生活の中で活用できているか」の肯定的回答が全国平均より低く、理科の学習と自分の生活が結びついておらず、学習に有用感をもてない状況がうかがえる。理科の学習内容を生活や社会と関連付け、学ぶ意味を実感できる授業づくりを進める必要がある。

(8)小学校理科 正答数分布グラフ及びレーダーチャート
正答数分布グラフ(横軸:正答数、縦軸:割合)



領域・観点・問題形式別 レーダーチャート



(9) 小学校理科設問別結果概要

| 設問番号 | 設問の概要 | 出題の趣旨 | 領域 | 正答率（％） | | | 無解答率（％） | | | 結果概要 |
|----------------|--|--|----------|--------|---------|--------|---------|---------|--------|---|
| | | | | 池田市 | 大阪府（公立） | 全国（公立） | 池田市 | 大阪府（公立） | 全国（公立） | |
| 1 (1) | 赤玉土の粒の大きさによる水のしみ込み時間の違いを調べる実験の条件について、コップAの土の量と水の量から、コップBの条件を書く | 赤玉土の粒の大きさによる水のしみ込み方の違いについて、赤玉土の量と水の量を正しく設定した実験の方法を発想し、表現することができるかどうかをみる | 生命・地球 | 82.4 | 76.2 | 79.5 | 2.3 | 3.1 | 2.5 | 正答率が全国を上回っており、水のしみ込み方の違いについて立証する実験方法を発想し、表現する力には一定の定着がみられる。 |
| 1 (2) | 赤玉土の粒の大きさによる水のしみ込み方の違いをまとめたわけについて、結果を用いて書く | 赤玉土の粒の大きさによる水のしみ込み方の違いについて、結果を基に結論を導いた理由を表現することができるかどうかをみる | 生命・地球 | 59.3 | 57.7 | 60.5 | 9.3 | 9.9 | 8.5 | 正答率が全国を下回っており、実験の結果を基にして、結論を導いた理由を表す力には課題がみられる。 |
| 1 (3) | 【結果】や【問題に対するまとめ】から、中くらの粒の赤玉土に水がしみ込む時間を予想し、予想した理由とともに選ぶ | 赤玉土の粒の大きさによる水のしみ込み方の違いについて、【結果】や【問題に対するまとめ】を基に、他の条件での結果を予想して、表現することができるかどうかをみる | 生命・地球 | 80.5 | 75.9 | 77.8 | 0.9 | 1.1 | 0.9 | 正答率が全国を上回っており、【結果】や【問題に対するまとめ】を基に、粒の大きさとしみ込む時間の関係を適切に捉えていると考えられる。 |
| 2 (1) | アルミニウム、鉄、銅について、電気を通すか、磁石に引き付けられるか、それぞれの性質に当てはまるものを選ぶ | 身の回りの金属について、電気を通す物、磁石に引き付けられる物があることの知識が身に付いているかどうかをみる | 物質・エネルギー | 10.7 | 9.9 | 10.6 | 0.8 | 0.7 | 0.6 | 正答率が全国を上回っており、身の回りの金属について、電気を通す物、磁石に引き付けられる物があるという知識が身に付いている。 |
| 2 (2) | 電気を通す物と通さない物でできた人形について、人形Aの剣を人形Bに当てたときだけ、ベルが鳴る回路を選ぶ | 電気の回路のつくり方について、実験の方法を発想し、表現することができるかどうかをみる | 物質・エネルギー | 44.0 | 40.1 | 42.9 | 0.6 | 0.8 | 0.6 | 正答率が全国を上回っており、電気の回路について、電気を通すときと通さないときのつなぎ方を理解している。 |
| 2 (3) | ベルをたたく装置の電磁石について、電流が流れる磁石の強さを強めるため、コイルの巻数の変え方を書く | 電流が流れる磁石の強さについて、電磁石の強さは巻数によって変わることの知識が身に付いているかどうかをみる | 物質・エネルギー | 82.0 | 75.9 | 78.0 | 2.8 | 3.1 | 2.7 | 正答率が全国を上回っており、電磁石の強さが電流の大きさと導線の巻数によって変わることを知識として習得できている。 |
| 2 (4) | 乾電池2個のつなぎ方について、直列につなぎ、電磁石を強くできるものを選ぶ | 乾電池のつなぎ方について、直列につなぎに関する知識が身に付いているかどうかをみる | 物質・エネルギー | 49.2 | 49.7 | 55.1 | 0.8 | 0.9 | 0.8 | 正答率が府・全国を下回っている。目的に応じた実験を行い、知識及び技能を高めながら問題を解決していくことを意識した授業改善が求められる。 |
| 3 (1) | ヘチマの花のおしべとめしべについて選び、受粉について書く | ヘチマの花のつくりや受粉についての知識が身に付いているかどうかをみる | 生命・地球 | 64.4 | 66.0 | 70.7 | 1.8 | 1.7 | 1.5 | 正答率が全国を下回っており、ヘチマの花のつくりや受粉についての基礎的な知識の定着に課題がみられる。 |
| 3 (2) | ヘチマの花粉を顕微鏡で観察するとき、適切な像にするための顕微鏡の操作を選ぶ | 顕微鏡を操作し、適切な像にするための技能が身に付いているかどうかをみる | 生命・地球 | 44.6 | 46.1 | 45.6 | 0.6 | 1.0 | 0.8 | 正答率が全国を下回っており、顕微鏡の適切な操作方法の定着について課題がみられる。観察等てくり返し使用する機会をつくる必要がある。 |
| 3 (3) | ヘチマの種子が発芽する条件を調べる実験において、条件を制御した解決の方法を選ぶ | 発芽するために必要な条件について、実験の条件を制御した解決の方法を発想し、表現することができるかどうかをみる | 生命・地球 | 61.2 | 58.4 | 62.0 | 1.5 | 2.0 | 1.7 | 正答率が全国を下回っており、実験の条件を制御しながら解決するための観察、実験の方法について、定着を図る必要がある。 |
| 3 (4) | レタスの種子の発芽の結果から、てみるさんの気付きを基に、見いだした問題について書く | レタスの種子の発芽の条件について、差異点や共通点を基に、新たな問題を見いだし、表現することができるかどうかをみる | 生命・地球 | 36.0 | 25.6 | 29.9 | 11.7 | 12.9 | 11.4 | 正答率は全国を上回っているが、無解答率が最も高い。差異点や共通点を基に適切な条件を表現することに課題があると考えられる。 |
| 4 (1) | 水の温まり方について、問題に対するまとめをいうために、調べる必要があることについて書く | 水の温まり方について、問題に対するまとめを導きだす際、解決するための観察、実験の方法が適切であったかを検討し、表現することができるかどうかをみる | 物質・エネルギー | 54.6 | 49.2 | 50.6 | 5.7 | 6.6 | 6.1 | 正答率は全国を上回っているが誤答も多く、問題を解決するための観察・実験方法が適切であったかふりかえるような授業展開が必要である。 |
| 4 (2) イウ | 水の蒸発について、温度によって水の状態が変化するという知識と関連付け、適切に説明しているものを選ぶ | 水の蒸発について、温度によって水の状態が変化するという知識を基に、概念的に理解しているかどうかをみる | 物質・エネルギー | 64.8 | 60.6 | 64.2 | 1 | 1.4 | 1.3 | 正答率が全国を上回っており、液体・気体の変化について概ね理解していると考えられる。 |
| 4 (2) エオ | 水の結露について、温度によって水の状態が変化するという知識と関連付け、適切に説明しているものを選ぶ | 水の結露について、温度によって水の状態が変化するという知識を基に、概念的に理解しているかどうかをみる | 物質・エネルギー | 59.0 | 54.1 | 57.5 | 1.2 | 1.6 | 1.5 | 正答率が全国を上回っており、温度によって水の状態が変化するという知識や概念が定着していると考えられる。 |
| 4 (3) カ | 海にある水がとけることについて、水が氷に変わる温度を根拠に予想しているものを選ぶ | 水が氷に変わる温度を根拠に、オホーツク海の氷の面積が減少した理由を予想し、表現することができるかどうかをみる | 物質・エネルギー | 60.3 | 58.6 | 59.8 | 1.4 | 2.5 | 2.3 | 正答率が全国を上回っており、学習したことをもとに、海の水と平均気温を関連付けて考察することができていると考えられる。 |
| 4 (3) キ | 水が陸から海へ流れていくことについて、水の行方と関連付けているものを選ぶ | 水がとけてきた水が海に流れていくことの根拠について、理科で学習したことと関連付けて、知識を概念的に理解しているかどうかをみる | 生命・地球 | 62.5 | 59.0 | 60.9 | 1.8 | 2.7 | 2.4 | 正答率が全国を上回っており、既習事項と関連付けて、知識を概念的に理解することができていると考えられる。 |
| 4 (3) ク | 海面水位の上昇について、水の温度による体積の変化を根拠に予想しているものを選ぶ | 「水は温まると体積が増える」を根拠に、海面水位の上昇した理由を予想し、表現することができるかどうかをみる | 物質・エネルギー | 65.8 | 63.8 | 65.6 | 1.9 | 2.7 | 2.5 | 正答率が全国を上回っており、提示された根拠をもとに、海面水位の上昇理由について正しく捉えていると考えられる。 |

2 中学校

(1) 中学校国語 結果分析と課題及び指導改善のポイント

中学校国語の正答数分布は、全 14 問中 9 問を頂点とする山型の分布となっている。また、平均正答率は 55.9%（全国：54.3%）で、全国を 2.6 ポイント上回っている。

観点別「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」における平均正答率をみると、全ての内容において全国を上回っている。また、評価の観点からみた平均正答率についても、「知識・技能」「思考・判断・表現」のどちらも全国を上回っており、概ね良好な結果である。

一方で、設問ごとの解答結果に着目すると、本市の課題もみられる。以下、顕著な課題が表れた設問について、具体的に示す。

【設問 1 三について】

出題の趣旨

書く内容の中心が明確になるように、内容のまとまりを意識して文章の構成や展開を考えることができるかどうかをみる。

本設問では、ちらし作りを進める中、ちらしに記載している情報を示す位置を変えた意図を説明したものとして適切なものはどれか選択する力が問われる。本市の正答率は 62.6%（全国：63.3%）と全国の平均正答率を下回る。

伝えたいことが明確になるように、内容のまとまりを意識して文章の構成や展開を考える力の育成には、「言葉のつながりを意識し、伝えたいことを整理していくスキル」を、小学校段階から重層的に積み重ねていく必要がある。また、「読み手」側の視点に立ち、どういう内容なら理解しやすいか考えさせるなど、多面的な視点で考える機会を設定していくことも重要である。

【設問 3 四について】

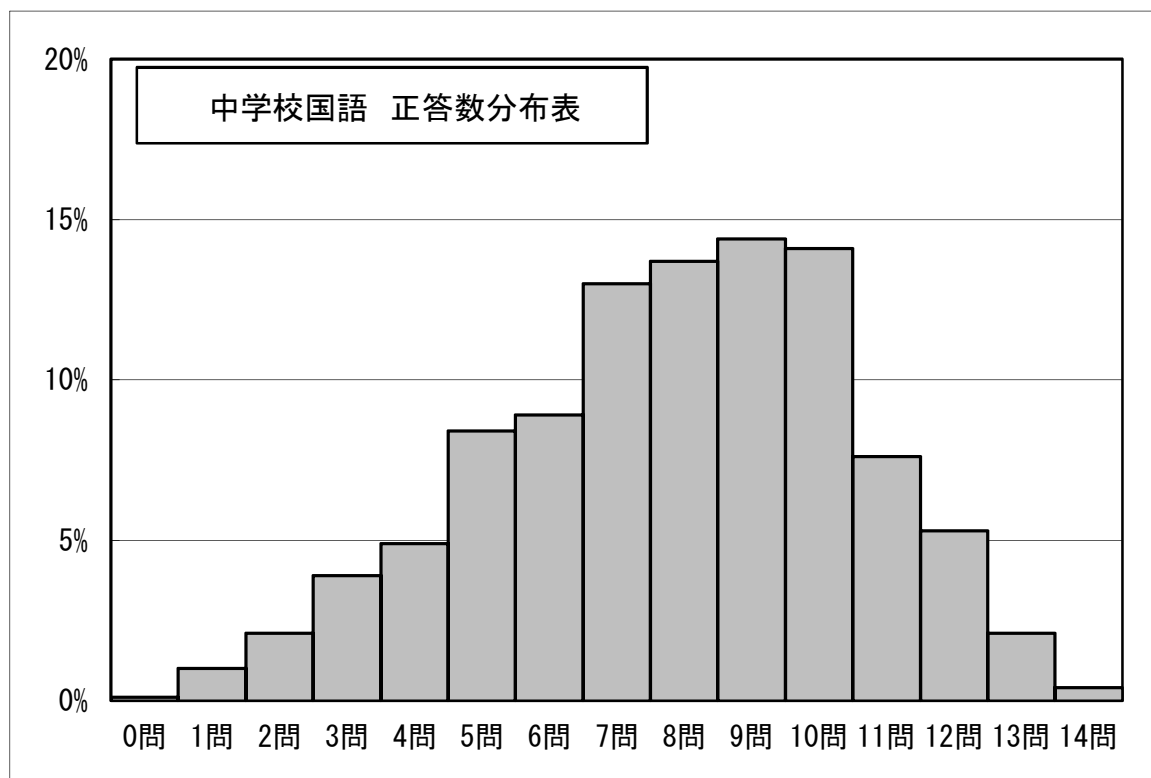
出題の趣旨

文章の構成や展開について、根拠を明確にして考えることができるかどうかをみる。

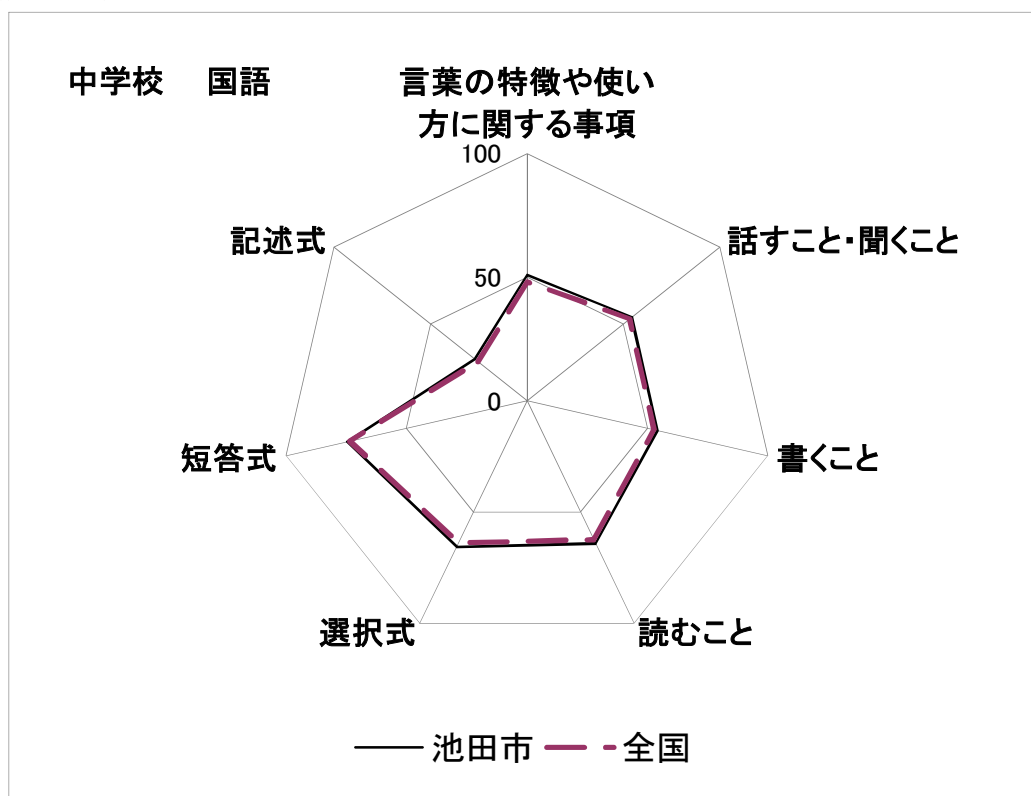
本設問は、2つの似た内容の文章が並んでいるとき、片方の文章には書かれている最後の場面が、もう1つの文章には書かれていないことで、読み手へ与える印象はどう変わるのかについて、自分の考えとそのように考えた理由を記述するものとなっている。本市の正答率は 19.1%（全国：17.1%）と全国の平均正答率を上回っているものの、正答率が2割を切っており、課題がみられる。また3割を超える無解答率も課題である。

自分の考えを根拠に基づいて論理的に記述することに課題がみられ、本設問以外にも記述に関わる設問では、誤答率、無解答率ともに上昇する傾向がある。記述力・表現力の育成には、「主張をもとに、理由付けを行い、必要に応じて具体例などを示したうえで、結論につなげる」など、型に基づき記述するといった具体的な指導が必要である。

(2)中学校国語 正答数分布グラフ及びレーダーチャート
正答数分布グラフ(横軸:正答数、縦軸:割合)



領域・観点・問題形式別 レーダーチャート



(3) 中学校国語科設問別結果概要

| 設問 番号 | 設問の概要 | 出題の趣旨 | 領域 | 正答率 (%) | | | 無解答率 (%) | | | 結果概要 |
|----------|---|--|---------------|---------|-----------------|------------|----------|-----------------|------------|---|
| | | | | 池田 市 | 大阪 府 (公立) | 全国 (公立) | 池田 市 | 大阪 府 (公立) | 全国 (公立) | |
| 1一 | 変換した漢字として適切なものを選択する (かいしん) | 文脈に即して漢字を正しく使うことができるかどうかをみる | 言葉の特徴や使い 方 | 42.6 | 35.2 | 35.2 | 0.0 | 0.2 | 0.2 | 正答率が全国を上回っているが、適切な語句を選択する問題での正答率が5割を下回っており、語彙力の低下がうかがえる。 |
| 1二 | ちらしに「会場図」を加えた目的を説明したものとして適切なものを選択する | 目的に応じて、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすることができるかどうかをみる | 書くこと | 85.8 | 81.2 | 82.5 | 0.1 | 0.2 | 0.2 | 正答率が全国を上回っており、目的に応じて、要素を追加するために材料を整理する力の定着は、概ね良好であると考えられる。 |
| 1三 | ちらしの中の情報について、示す位置を変えた意図を説明したものとして適切なものを選択する | 書く内容の中心が明確になるように、内容のまとまりを意識して文章の構成や展開を考えることができるかどうかをみる | 書くこと | 62.6 | 59.4 | 63.3 | 0.5 | 0.4 | 0.5 | 正答率が全国を下回っており、伝える内容の中心が明確になるように、構成や展開を考える力に一定の課題がみられる。 |
| 1四 | ちらしの読み手に向けて、今年の美術展の工夫について伝える文章を書く | 自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書くことができるかどうかをみる | 書くこと | 33.4 | 27.8 | 31.0 | 2.3 | 2.1 | 1.6 | 正答率は全国を上回っているが、3割強の正答率に留まっている。根拠を明確にしながら、自分の言葉で文章を記述する力については課題がみられる。 |
| 2一 | スライドを使ってどのように話しているのかを説明したものとして適切なものを選択する | 資料や機器を用いて、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫することができるかどうかをみる | 話すこと 聞くこと | 38.7 | 36.7 | 38.1 | 0.1 | 0.4 | 0.3 | 正答率は全国を上回っているが、4割弱の正答率に留まる。複数の資料から、話し手の意図を読み取る力には、課題がみられる。 |
| 2二 | 聞き手の反応を見て発した言葉について、そのように発言した理由を説明したものとして適切なものを選択する | 相手の反応を踏まえながら、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫することができるかどうかをみる | 話すこと 聞くこと | 80.6 | 75.6 | 77.9 | 0.1 | 0.4 | 0.3 | 正答率が全国を上回っており、聞き手の反応を見ながら、なぜそのように発言したのかの理由を選択する力の定着は良好であると考えられる。 |
| 2三 | 「話の順序を入れ替えた方がよい」という助言の意図を説明したものとして適切なものを選択する | 自分の考えが明確になるように、論理の展開に注意して、話の構成を工夫することができるかどうかをみる | 話すこと 聞くこと | 73.9 | 71.1 | 73.4 | 0.8 | 0.8 | 0.6 | 正答率が全国を上回っており、資料の提示の流れを理解したうえで、助言の意図を読み取る力が定着していると考えられる。 |
| 2四 | 発表のまとめの内容をより分かりやすく伝えるためのスライドの工夫について、どのような助言をするか、自分の考えを書く | 資料や機器を用いて、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫することができるかどうかをみる | 話すこと 聞くこと | 24.2 | 19.5 | 23.2 | 4.4 | 4.9 | 4.0 | 正答率が全国を上回っているものの、正答率は2割強である。相手に伝え、より効果的なものを生み出すための助言を、具体的に記述する力には、大きな課題がみられる。 |
| 3一 | 物語の始めに問いかけが示されていることについて、その効果を説明したものとして適切なものを選択する | 表現の効果について、根拠を明確にして考えることができるかどうかをみる | 読むこと | 82.2 | 79.3 | 80.0 | 0.3 | 0.5 | 0.5 | 正答率が全国を上回っており、物語の導入部の意図を正確に読み取る力がある生徒が多いと考えられる。 |
| 3二 | 「兄」と「弟」が、物語の中でどのような性格の人物として描かれているかを書く | 文章全体と部分との関係に注意しながら、登場人物の設定の仕方を捉えることができるかどうかをみる | 読むこと | 91.3 | 88.6 | 89.9 | 4.4 | 5.2 | 4.0 | 9割を超える正答率である一方、無解答率が他の設問に比べて高い。はじめから物語を読み進めることが困難な生徒が一定数いると考えられる。 |
| 3三 | 「しきりと」の意味として適切なものを選択する | 事象や行為を表す語彙について理解しているかどうかをみる | 言葉の特徴や使い 方 | 59.3 | 60.5 | 61.0 | 0.5 | 0.8 | 0.8 | 正答率が、全国、大阪府ともに下回っている。「しきりと」のような普段使う機会の少ない品詞を知らないなど、語彙力の少なさが課題と考えられる。 |
| 3四 | 「一 榎木の実」に書かれている場面が、「二 釣の話」には書かれていないことによる効果について、自分の考えとそう考えた理由を書く | 文章の構成や展開について、根拠を明確にして考えることができるかどうかをみる | 読むこと | 19.1 | 15.6 | 17.1 | 30.9 | 30.6 | 28.1 | 正答率が2割を切っていることに加え、無解答率も3割を超える。二つの物語の結末を比較し、読み手へ与える印象の違いを記述するための総合的な読み取りの力には課題が見られる。 |
| 4一 | 手紙の下書きを見直し、誤って書かれている漢字を見付けて修正する | 読み手の立場に立って、表記を確かめて、文章を整えることができるかどうかをみる | 書くこと | 57.8 | 56.7 | 57.3 | 29.1 | 33.2 | 33.5 | 正答率は全国をやや上回っているが、「専門」が「専門」と誤用されることは多い。生徒へ誤用されやすい語句に関わる語彙力を身につけさせていく必要がある。 |
| 4二 | 手紙の下書きを見直し、修正した方がよい部分を見付けて修正し、修正した方がよいと考えた理由を書く | 読み手の立場に立って、語句の用法、叙述の仕方などを確かめて、文章を整えることができるかどうかをみる | 書くこと | 31.6 | 27.4 | 30.1 | 15.9 | 20.6 | 19.1 | 正答率は全国を上回っているが、3割強の正答率に留まる。普段手紙を書ききれない生徒が多く、推敲の仕方が分からない生徒が多数いることがうかがえる。 |

（４）中学校数学 結果分析と課題及び指導改善のポイント

平均正答率は 54.5%（全国：48.3%）で、全国を 6.2 ポイント上回っている。15 問全てにおいて全国及び大阪府の正答率を上回っており、非常に良好な結果といえる。本市の数学科教員による具体例や身近な事象と結びつけた授業展開や個別最適化された学習支援に一定の成果がみられた。図形分野においては正答率が 54.5%（全国：46.5%）で、全国を 8 ポイント上回り、特に証明問題における学習の充実がうかがえる。一方で、本市において近年課題としていた「データの活用」の領域については平均正答率が 61.6%（全国：58.6%）と改善傾向にあるが、確率の根本的な概念の理解や不確定な事象の起こりやすさの捉えの不十分さがうかがえた。また、関数分野において、問題解決の方法を具体的かつ数学的に説明する力が弱いことが明らかになった。

以下、顕著な課題がみられた設問について、具体的に示す。

【設問 7（２）について】

出題の趣旨

不確定な事象の起こりやすさの傾向を捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することができるかどうかをみる。

本市の正答率は 57.5%（全国：55.9%）で、全国平均を上回ったが、確率を算出するための基本となる樹形図をかいて場合の数を正しく数えるスキルが不足していると推測される。本設問は、特別なじゃんけんの試行の場合の数を正確に数え上げ、確率の定義に基づいて事象の起こりやすさを判断し、その理由を論理的に説明できるかが問われる。指導にあたっては、様々な事象について樹形図を正確にかいて訓練を徹底することが不可欠である。そして、全事象の数を分母に、注目する事象の場合の数を分子に置くという確率の公式の概念を確実に理解させ、算出した確率の値が持つ意味を具体的な言葉で表現する練習をすることが重要である。単なる計算に終わらないよう、図示による思考の整理や公式の概念理解について、指導の充実を図る必要がある。

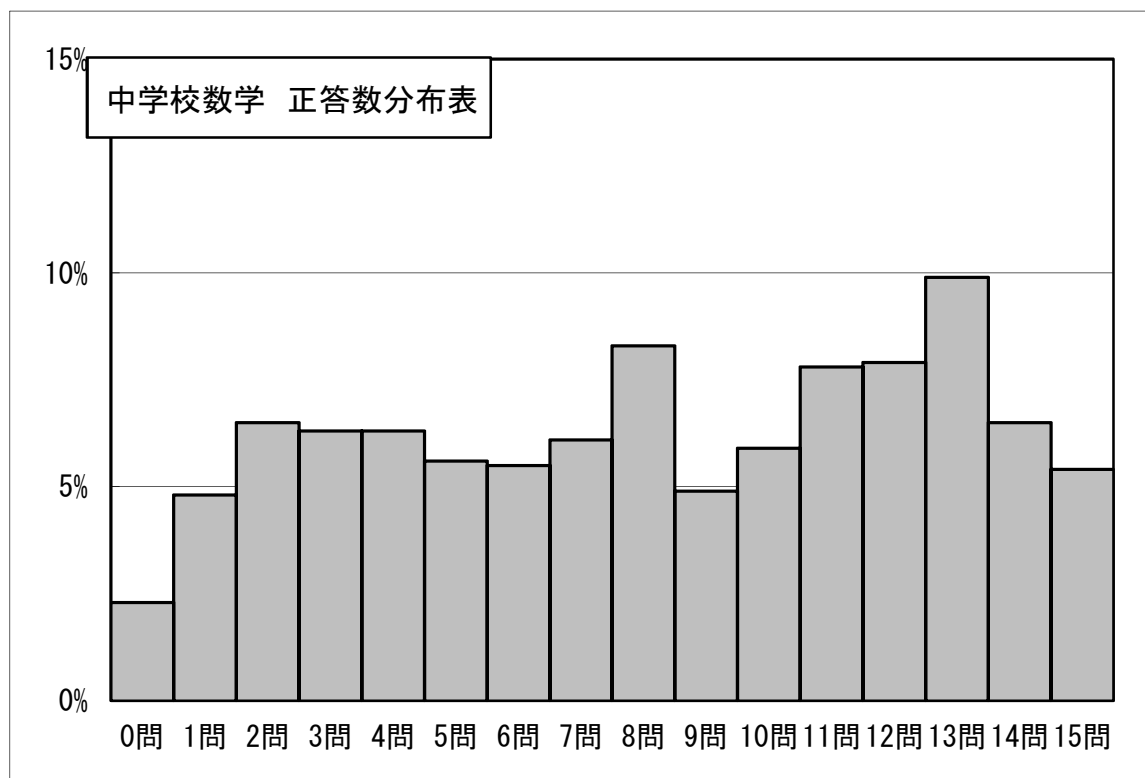
【設問 8（２）について】

出題の趣旨

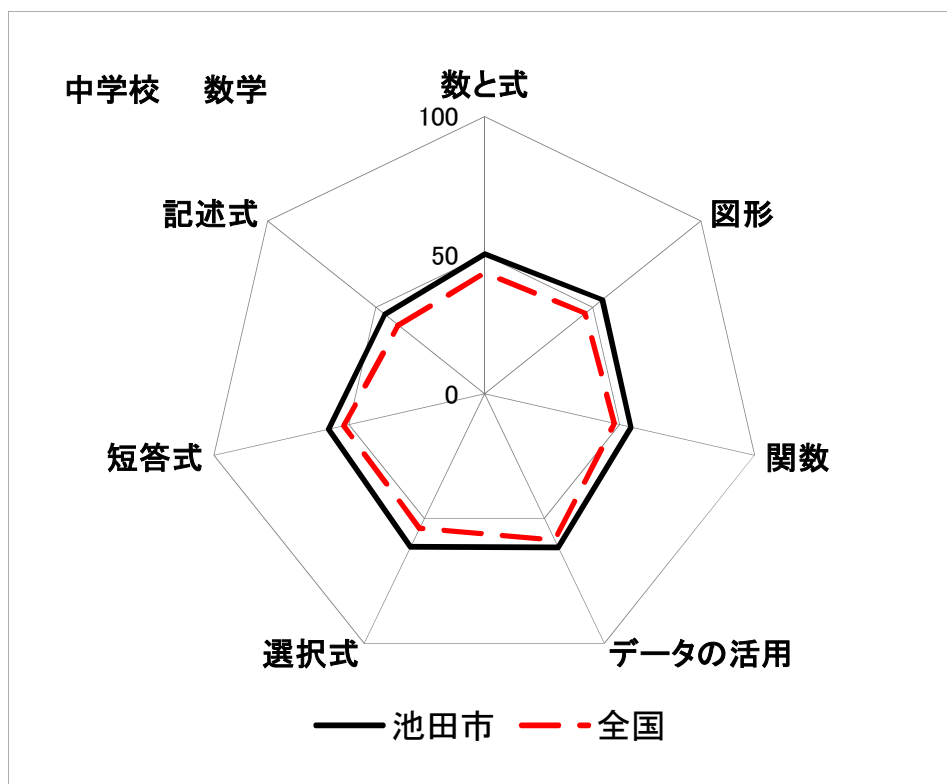
事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明することができるかどうかをみる。

本設問は正答率が 43.5%（全国：38.0%）と、全国を 5.5%上回っているが、無解答率が 32.6%と高い。運賃が走行距離に比例する比例関係のグラフにおいて、本事象を数学的な表現を用いて座標やグラフと関連付けて具体的な言葉で説明する必要があるが、このような経験が授業や日常生活で不足していると考えられる。また、関数分野においては式、表、グラフが同じ現象を表していることが理解できず、それぞれを独立した情報として捉えてしまっている生徒も多い。解答プロセスのテンプレートを示し、思考の流れを言語化する練習を徹底し、問題解決の構想を立てたり、問題解決の過程や結果を振り返ったりする活動を積極的に取り入れる必要がある。

(5)中学校数学 正答数分布グラフ及びレーダーチャート
正答数分布グラフ(横軸:正答数、縦軸:割合)



領域・観点・問題形式別 レーダーチャート



(6) 中学校数学科設問別結果概要

| 設問 番号 | 設問の概要 | 出題の趣旨 | 領域 | 正答率 (%) | | | 無解答率 (%) | | | 結果概要 |
|----------|---|---|--------|---------|-----------------|------------|----------|-----------------|------------|---|
| | | | | 池田 市 | 大阪 府 (公立) | 全国 (公立) | 池田 市 | 大阪 府 (公立) | 全国 (公立) | |
| 1 | 1から9までの数の中から素数を全て選ぶ | 素数の意味を理解しているかどうかをみる | 数と式 | 42.2 | 31.2 | 31.8 | 0.5 | 0.8 | 0.7 | 正答率が全国を上回っているものの、正答率が42.2%と低く、素数の意味を十分に理解できていないと考えられる。 |
| 2 | 果汁40%の飲み物a mLに含まれる果汁の量を、aを用いた式で表す | 数量を文字を用いた式で表すことができるかどうかをみる | 数と式 | 58.6 | 52.0 | 51.9 | 7.9 | 8.3 | 7.3 | 正答率が比較的高く、文字式のルールはある程度理解しているといえるが、一方で、無解答率が全国よりも高く、文字による表現に適應できていない生徒がいると考えられる。 |
| 3 | △ABCにおいて、∠Aの大きさが50°のときの頂点Aにおける外角の大きさを求める | 多角形の外角の意味を理解しているかどうかをみる | 図形 | 62.9 | 60.7 | 58.1 | 1.3 | 2.3 | 2.0 | 正答率が全国を上回っており、平面図形における多角形の外角の意味は一定理解できている。 |
| 4 | 一次関数 $y = 6x + 5$ について、xの増加量が2のときのyの増加量を求める | 一次関数 $y = ax + b$ について、変化の割合を基に、xの増加量に対するyの増加量を求めることができるかどうかをみる | 関数 | 42.7 | 33.9 | 34.7 | 7.5 | 8.8 | 8.0 | 全国を大幅に上回っているものの、正答率が低い。xが1増えるとyはどれだけ増えるかという変化の割合の概念を捉えられていない生徒が多いと考えられる。 |
| 5 | ある学級の生徒40人のハンドボール投げの記録をまとめた度数分布表から、20m以上25m未満の階級の相対度数を求める | 相対度数の意味を理解しているかどうかをみる | データの活用 | 47.8 | 36.5 | 42.5 | 10.7 | 11.0 | 9.4 | 正答率が半数に満たず、相対度数という専門用語の理解が曖昧な生徒が一定数いることがうかがえる。 |
| 6 (1) | 連続する二つの3の倍数の和が9の倍数になるとは限らないことの説明を完成するために、予想が成り立たない例をあげ、その和を求める | 事柄が常に成り立つとは限らないことを説明する場面において、反例をあげることができるかどうかをみる | 数と式 | 64.1 | 60.0 | 62.8 | 5.3 | 6.4 | 4.6 | 全国をわずかに上回る正答率である。反例を見つけることで、不完全な推論や誤解を認識する力が養われるため、命題の真偽を判断する練習、そして正しくない命題に対して反例をあげる練習を普段から繰り返す必要がある。 |
| 6 (2) | $3n$ と $3n+3$ の和を $2(3n+1)+1$ と表した式から、連続する二つの3の倍数の和がどんな数であるかを説明する | 式の意味を読み取り、成り立つ事柄を見だし、数学的な表現を用いて説明することができるかどうかをみる | 数と式 | 33.4 | 24.5 | 25.7 | 25.0 | 28.8 | 24.9 | 全国を上回っているものの、正答率が最も低い。成り立つ事象を見出してそれを数学的な表現で説明する力をつける必要がある。 |
| 6 (3) | 連続する三つの3の倍数の和が、9の倍数になることの説明を完成する | 目的に応じて式を変形したり、その意味を読み取ったりして、事柄が成り立つ理由を説明することができるかどうかをみる | 数と式 | 53.2 | 44.3 | 45.2 | 17.7 | 23.6 | 20.2 | 正答率が5割を超え、全国の正答率を大幅に上回っている。目的を達成するために、どうすれば式を変形できるかというパターンはある程度身につけているとみられる。 |
| 7 (1) | Aの手元のカードが3枚とも「グー」、Bの手元のカードが3枚とも「チョキ」でじゃんけんカードゲームの1回目を行うとき、1回目にAが勝つ確率を書く | 必ず起こる事柄の確率について理解しているかどうかをみる | データの活用 | 79.5 | 75.9 | 77.4 | 3.3 | 4.4 | 3.2 | 全国の正答率をわずかに上回っているが、2割程度の生徒については、確率の根本的な概念を理解できていないと考えられる。 |
| 7 (2) | Aの手元のカードが「グー」、「チョキ」、「パー」、Bの手元のカードが「グー」、「チョキ」の2枚のとき、AとBの勝ちやすさについての正しい記述を選び、その理由を確率を用いて説明する | 不確定な事象の起こりやすさの傾向を捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することができるかどうかをみる | データの活用 | 57.5 | 52.4 | 55.9 | 1.6 | 2.6 | 2.2 | 全国の正答率とほぼ同等である。確率分野においては、正しい樹形図が書ける力と正しく場合の数を数える力を育成する必要がある。 |
| 8 (1) | A駅からの走行距離と運賃の関係を表すグラフの何を読み取ればC駅とD駅の間の走行距離が分かるかを選ぶ | 事象に即して、グラフから必要な情報を読み取ることができるかどうかをみる | 関数 | 76.7 | 69.2 | 71.9 | 1.5 | 2.4 | 2.3 | 正答率が全国を上回っているうえに、無解答率も低いことから、座標やグラフから必要な情報を読み取る力が、定着しているとみられる。 |
| 8 (2) | A駅から60.0km地点につくられる新しい駅の運賃がおよそ何円になるかを求める方法を説明する | 事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明することができるかどうかをみる | 関数 | 43.5 | 35.9 | 38.0 | 32.6 | 37.9 | 35.0 | 全国の正答率を上回ってはいるものの、高くない正答率である。関数分野の基本的な理解は概ね良好だが、問題文を正確に読み取り、関数のグラフを活用して自力解決する力は弱いと考えられる。 |
| 9 (1) | 四角形AECFが平行四辺形であることの証明を振り返り、新たに分かることを選ぶ | 証明を振り返り、証明された事柄を基にして、新たに分かる辺や角についての関係を見いだすことができるかどうかをみる | 図形 | 65.2 | 56.9 | 58.5 | 0.4 | 1.2 | 1.1 | 正答率が全国を上回っており、平行四辺形の定理を丸暗記するだけでなく、その意味を理解して問題解決に適用できている生徒が多いと考えられる。 |
| 9 (2) | 平行四辺形ABCDの辺CB、ADを延長した直線上にBE=DFとなる点E、Fを取っても、四角形AECFは平行四辺形となることの証明を完成する | 統一的・発展的に考え、条件を変えた場合について、証明を評価・改善することができるかどうかをみる | 図形 | 47.6 | 34.4 | 36.3 | 6.8 | 8.0 | 7.2 | 正答率は半数に満たないが、全国を上回っており、証明に関する指導が丁寧になされていることがうかがえる。 |
| 9 (3) | 平行四辺形ABCDの辺BC、DAを延長した直線上にBE=DFとなる点E、Fを取り、辺ABと線分FCの交点をG、辺DCと線分FEの交点をHとしたとき、四角形AGCHが平行四辺形になることを証明する | ある事柄が成り立つことを構想に基づいて証明することができるかどうかをみる | 図形 | 42.2 | 33.0 | 33.2 | 29.7 | 35.2 | 31.5 | 正答率が全国を上回っており、証明のゴールとなる条件が示されているため、記述しやすかった問題と考えられる。証明が苦手な生徒に対しては、ヒントを具体的に与え、少しずつ自力解決できるような指導が必要である。 |

(7) 中学校理科分析と課題及び指導改善のポイント

中学校理科全体の平均正答率は53.8%であり、全国平均を2.3ポイント上回った。領域ごとに全国平均と比べると「エネルギー」「生命」「地球」領域が上回っており、「粒子」領域のみが下回った。18問中13問が全国の前答率を上回っており、良好な結果といえる。ただし、無解答率においては、全国平均より1.3ポイント高くなっており、この点は課題とみられる。

「エネルギー」領域では、対象5問の平均正答率が60.2%であり全国平均より4.1ポイント上回った。知識・技能に関する問題については、概ね正答率が全国平均を上回っている一方、考察をより確かなものにするために必要な実験を選択し、予想される実験の結果を記述する問題については、記述式問題ということもあってか、正答率が15.9%(全国:14.0%)と、もっとも低く課題がみられた。結果を予想しながら観察や実験を行うとともに、予想と結果を比較しながら考察する活動などを充実させる必要がある。

「粒子」領域では、対象5問の平均正答率が60.6%であり全国平均より0.8ポイント上回った。そんな中、「理科の実験では、なぜ水道水ではなく精製水を使うのか」という疑問を解決するための課題を記述する問題においては、唯一正答率が全国平均を下回っており、無解答率も高い。粒子領域の知識・技能を日常生活や社会の中の事象と結び付けながら、身の回りに生じた疑問について解決するための課題を探究するような授業展開が必要である。

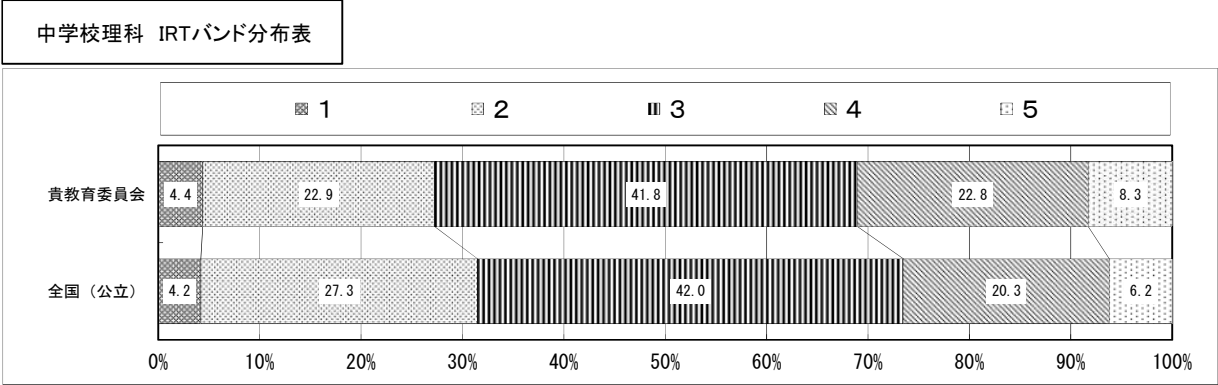
「生命」領域では、対象3問の平均正答率が49.2%であり、全国平均を3.4ポイント上回った。植物「ノジギク」のスケッチを見て、スケッチの技能について適切に答える問題や「サクユリ」のスケッチからサクユリの茎の断面や根の構造について適切に表現しているものを選択する問題の前答率が、全国平均を上回っていることから、普段から観察活動を大切にしていることがうかがえる。

「地球」領域では、対象5問の平均正答率は38.6%(全国平均:37.2%)であり全国平均をやや上回ったが、4領域の中ではもっとも低い結果となった。小学校で学習した知識及び技能と地層に関する学習を関連付けて分析する問いなど、これまで学習したことと理科の学習をつなげて考察することに課題がみられる。既習事項や生活経験とのつながり、小学校と中学校の内容のつながりを意識して授業や単元を計画することが必要である。

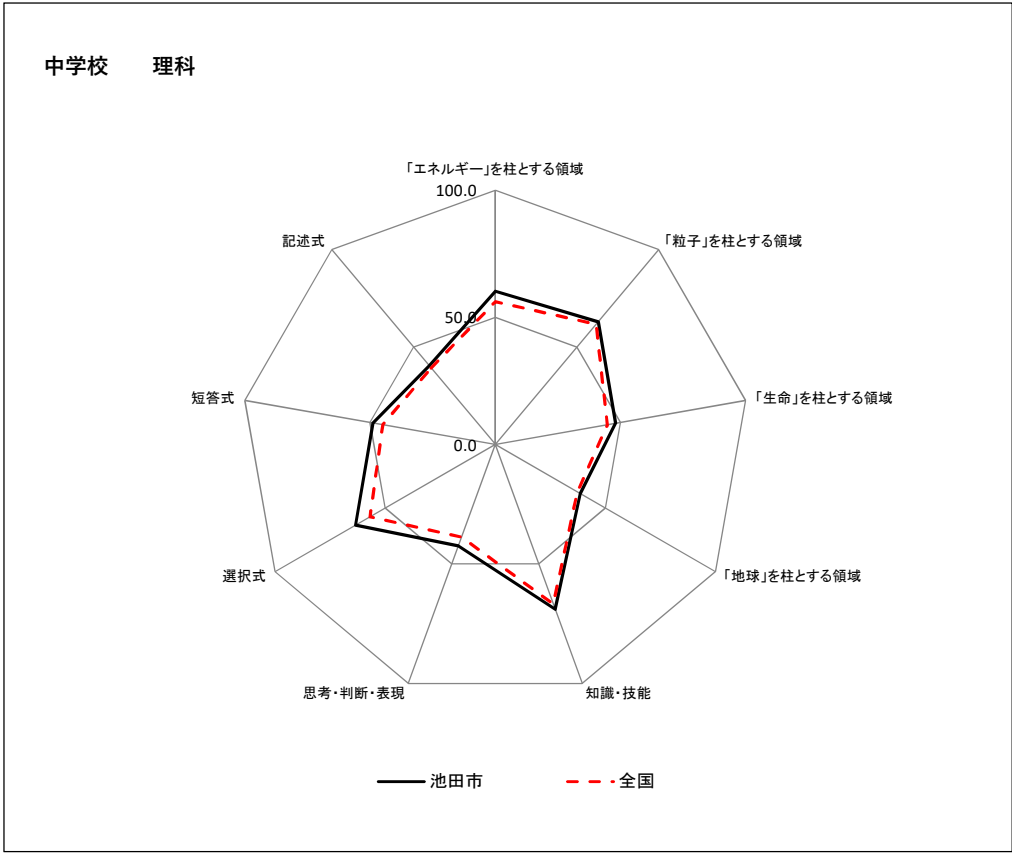
観点別の平均正答率でみると、「思考・判断・表現」及び「知識・技能」の両方において、全国平均を上回っていることから、理科全体における学びの定着については概ね良好といえる。しかし、無解答率が高い問題においては、「思考・判断・表現」を伴う記述式もしくは短答式の問題であることから、情報の読み取り・分析・説明・表現する力に課題があると考えられる。今後、日常生活との関連を図りながら、実験や観察を通して、予想と結果を考察するとともに、それらを比較したりまとめたりする活動の充実を図る必要がある。

(8)中学校理科 IRTバンド分布比較
 *IRTバンド分布(横軸:割合 及び IRTバンド)

<*IRTバンド>
 IRTスコア(IRTに基づいて各設問の正誤パターンから学力を推定し、500を基準にした得点で表すもの。)を1～5の段階に区切ったもの。3を基準のバンドとし、5が最も高いバンドとなる。IRTバンドで表示するのは、IRT分析の精度も踏まえ、細かな差異に捉われすぎることなく、全体の課題把握と指導改善に生かすことを趣旨としている。



領域・観点・問題形式別 レーダーチャート



(9) 中学校理科設問別結果概要

| 設問番号 | 設問の概要 | 出題の趣旨 | 領域 | 正答率 (%) | | | 無解答率 (%) | | | 結果概要 |
|----------|---|--|-------|---------|---------|--------|----------|---------|--------|---|
| | | | | 池田市 | 大阪府(公立) | 全国(公立) | 池田市 | 大阪府(公立) | 全国(公立) | |
| 1 (1) | 電熱線を利用して水を温めるための電気回路について、直列と並列とで回路全体の抵抗が大きい装置や速く水が温まる装置を選択する | 電熱線で水を温める学習場面において、回路の電流・電圧と抵抗や熱量に関する知識及び技能が身に付いているかどうかをみる | エネルギー | 58.5 | 52.7 | 51.9 | 0.8 | 0.4 | 0.2 | 正答率が全国を上回っており、回路の電流・電圧と抵抗や熱量に関する知識・技能が定着していると考えられる。 |
| 1 (2) | 「理科の実験では、なぜ水道水ではなく精製水を使うのかな？」という疑問を解決するための課題を記述する | 身の回りの事象から生じた疑問や見いだした問題を解決するための課題を設定できるかどうかをみる | 粒子 | 40.5 | 40.2 | 46.2 | 12.9 | 11.6 | 8.0 | 正答率が全国を下回っており、身の回りの事象から生じた疑問などを解決するための課題を設定する力に課題がみられる。 |
| 1 (3) | 地層1から地層4までの性質から、水が染み出る場所を判断し、その場所を選択する | 露頭のどの位置から水が染み出るかを観察する場面において、小学校で学習した知識を基に、地層に関する知識及び技能を関連付けて、地層を構成する粒の大きさとすき間の大きさに着目して分析して解釈できるかどうかをみる | 地球 | 35.8 | 33.5 | 36.2 | 1.6 | 1.1 | 0.6 | 正答率が低く、全国を下回っている。地層を構成する粒の大きさとすき間の大きさに着目して、分析して解釈できる力をつけるために指導の工夫が必要である。 |
| 1 (4) | 生物1から生物4までの動画を見て、呼吸を行う生物をすべて選択する | 水の中の生物を観察する場面において、呼吸を行う生物について問うことで、生命を維持する働きに関する知識が概念として身に付いているかどうかをみる | 生命 | 28.4 | 27.7 | 29.7 | 0.8 | 0.4 | 0.2 | 正答率が低く、全国を下回っている。生命を維持する働きに関する知識の習得に課題がみられる。 |
| 1 (5) | 塩素の元素記号を記述する | 塩素の元素記号を問うことで、元素を記号で表すことに関する知識及び技能が身に付いているかどうかをみる | 粒子 | 48.8 | 45.6 | 44.9 | 11.1 | 9.9 | 8.5 | 正答率が全国を上回っており、元素記号の理解や元素で表すことに関する知識・技能の定着について良好な結果である。 |
| 1 (6) | 水道水と精製水に関する2人の発表を見て、探究の過程におけるあなたの振り返りを記述する | 科学的な探究を通してまとめたものを他者が発表する学習場面において、探究から生じた新たな疑問や身近な生活との関連などに着目した振り返りを表現できるかどうかをみる | 粒子 | 80.0 | 73.9 | 79.5 | 12.6 | 13.4 | 9.9 | 正答率が全国を上回っており、探究から生じた新たな疑問や身近な生活との関連などに着目した振り返りを表現できる力があると考えられる。 |
| 2 (1) | 【考察】をより確かなものにするために必要な実験を選択し、予想される実験の結果を記述する | 【考察】をより確かなものにするために、音に関する知識及び技能を活用して、変える条件に着目した実験を計画し、予想される実験の結果を適切に説明できるかどうかをみる | エネルギー | 15.9 | 12.4 | 14.0 | 3.1 | 3.0 | 1.9 | 正答率は全国を上回っているものの、全体の中で最も低い正答率となっている。音に関する知識を活用して、実験を計画し、予想される実験結果を適切に説明する力に、課題がみられる。 |
| 2 (2) | 「Webページの情報だけを信用して考察してよいか」について判断し、その理由として適切なものをすべて選択する | ストローの太さと音の高低に関する情報を収集してまとめるを行う学習活動の場で、収集する資料や情報の信頼性についての知識及び技能が身に付いているかどうかをみる | エネルギー | 93.1 | 92.0 | 94.6 | 1.0 | 0.4 | 0.1 | 正答率が高いが、全国を下回っている。収集する資料や情報の信頼性に関する知識・技能を身につけることに課題がみられる。 |
| 3 (1) | 設定した【仮説】が正しい場合の実験結果の予想を選択する | 仮説を立てて科学的に探究する学習場面において、電気回路に関する知識及び技能を活用して、仮説が正しい場合の結果を予想することができるかどうかをみる | エネルギー | 40.6 | 34.6 | 34.9 | 0.0 | 0.2 | 0.2 | 正答率が全国を上回っており、電気回路に関する知識・技能を活用して、仮説が正しい場合の結果を予想する力が身についている。 |
| 3 (2) | 抵抗に関する知識を手掛かりに、身近な電気回路に抵抗がついている理由を選択する | 身近な電化製品の電気回路について探究する学習場面において、回路に抵抗がついている理由を問うことで、抵抗に関する知識が概念として身に付いているかどうかをみる | エネルギー | 93.0 | 83.1 | 85.2 | 0.4 | 0.2 | 0.1 | 正答率が全国を上回っており、抵抗に関する知識と、電気回路に関する概念が身についていると考えられる。 |
| 4 (1) | プロパンガスと都市ガスでシャボン玉を作ったときの様子から、プロパンガス、都市ガス、空気の密度の大小を判断し、小さい順に並べる | ガス警報器の設置場所が異なる理由を考える学習場面において、実験の様子と、密度に関する知識および技能を関連付けて、それぞれの気体の密度の大小関係を分析して解釈できるかどうかをみる | 粒子 | | 45.2 | 50.4 | | 0.3 | 0.1 | 池田市は未実施。 |
| 4 (2) | 「一酸化炭素は空気より軽い」という性質を基に、適切な避難行動を選択する | 火災における適切な避難行動を問うことで、気体の性質に関する知識が概念として身に付いているかどうかをみる | 粒子 | | 92.2 | 92.8 | | 0.2 | 0.1 | 池田市は未実施。 |
| 5 (1) | 加熱を伴う実験において、火傷をしたときの適切な応急処置を選択する | 加熱を伴う実験における実験器具の操作等に関する技能が身に付いているかどうかを見る | 粒子 | 93.6 | 90.9 | 93.0 | 0.7 | 0.2 | 0.1 | 正答率が全国を上回っている。加熱を伴う実験における実験器具の操作等に関する技能は、一定身についていると考えられる。 |
| 5 (2) | 実験の動画と実験結果の図から、どのような化学変化が起きているか判断し、原子や分子のモデルを移動させることで、その化学変化をモデルで表す | 化学変化に関する知識及び技能を活用して、実験の結果を分析して解釈し、化学変化を原子や分子のモデルで表すことができるかどうかをみる | 粒子 | 40.5 | 33.0 | 35.6 | 5.2 | 5.3 | 4.6 | 正答率は全国を上回っているものの、無解答率が高い。実験結果を分析して解釈し、化学変化を原子や分子のモデルで表す力には課題がある。 |
| 6 (1) | 牧野富太郎の「ノジギク」のスケッチから分かるスケッチの技能について、適切なものを選択する | スケッチから分かることを問うことで、スケッチに関する知識及び技能が身に付いているかどうかをみる | 生命 | 70.1 | 63.5 | 65.9 | 0.0 | 0.3 | 0.2 | 正答率が全国を上回っており、スケッチに関する知識・技能の定着については、良好な結果である。 |
| 6 (2) | 牧野富太郎の「サクユリ」のスケッチから、サクユリの【茎の横断面】、【根】として適切なものを判断し、選択する | スケッチから分かる植物の特徴を基に、植物の葉、茎、根のつくりに関する知識及び技能を活用して、植物の茎の横断面や根の構造について適切に表現できるかどうかをみる | 生命 | 49.2 | 38.8 | 41.9 | 0.0 | 0.2 | 0.1 | 正答率が全国を上回っており、植物の葉、茎、根のつくりに関する知識・技能を活用して、植物の茎の横断面や根の構造について適切に表現できる力が、概ね身についていると考えられる。 |

| | | | | | | | | | | |
|----------|--|---|-------|------|------|------|-----|-----|-----|---|
| 7 (1) | 小腸の柔毛、肺の肺胞、根毛に共通する構造と同じ構造をもつものとして適切な事象を判断し、選択する | 小腸の柔毛、肺の肺胞、根毛に共通する構造について学習する場面において、共通性と多様性の見方を働かせながら比較し、多面的、総合的に分析して解釈することができるかどうかをみる | 生命 | | 32.1 | 34.8 | | 0.4 | 0.2 | 池田市は未実施。 |
| 7 (2) | 消化によってデンプンがブドウ糖に分解されることと、同じ化学変化であるものを選択する | 分解に関する身近な事象を問うことで、これまでに学習した理科の知識及び技能を基に、化学変化の分解の知識が概念として身に付いているかどうかをみる | 生命・粒子 | | 49.7 | 51.6 | | 0.4 | 0.2 | 池田市は未実施。 |
| 8 (1) | 大地の変化に関する言い伝えを1つ選択し、その選択した言い伝えが科学的に正しいと判断するための理由を「地層を調べたときに何が分かればよいか」に着目して記述する | 地域の言い伝えを科学的に探究する学習場面において、大地の変化と、地層の様子やその構成物に関する知識及び技能を関連付けて、地層の重なり方や広がり方を推定できるかどうかをみる | 地球 | 44.9 | 36.8 | 42.1 | 3.4 | 4.5 | 3.2 | 正答率が、全国を上回っている。大地の変化と地層の様子やその構成物に関する知識・技能を関連付けて、地層の重なり方や広がり方を推定する力の定着について、良好と考えられる。 |
| 8 (2) | Aさんの考えを肯定するためにはボーリング地点③の結果がどのようになればよいかを判断し、青色の地層を移動させ、ボーリング地点③の結果をモデルで示す | 大地の変化について、時間的・空間的な見方を働かせて、土地の様子とボーリング調査の結果を関連付けて、地層の広がりを検討して表現できるかどうかをみる | 地球 | 20.6 | 18.4 | 18.0 | 1.9 | 1.8 | 1.1 | 正答率は低い、全国を上回っている。土地の様子とボーリング調査の結果を関連付けて、地層の広がりを検討して表現する力については、課題がみられる。 |
| 9 (1) | 【予想】から学習した内容が反映されたAさんの【振り返り】を読み、Aさんの【予想】を判断し、選択する | 気圧について科学的に探究する場面において、状態変化や圧力に関する知識及び技能を基に、予想が反映された振り返りについて問うことで、探究の過程の見通しについて分析して解釈できるかどうかをみる | 地球 | 33.9 | 27.9 | 31.8 | 0.3 | 0.8 | 0.3 | 正答率は低い、全国を上回っている。状態変化や圧力に関する知識・技能を基に、探究の過程の見通しについて解釈する力は、課題がみられる。 |
| 9 (2) | クリーンルームのほかに気圧を利用している身近な事象を選択する | 気圧に関する身近な事象を問うことで、気圧の知識が概念として身に付いているかどうかをみる | 地球 | 57.8 | 53.1 | 58.1 | 0.7 | 0.7 | 0.3 | 正答率が全国を下回っており、気圧に関する知識が概念として身に付いていないことが考えられる。 |

4(1)、4(2)、7(1)、7(2)の設問については、非公開問題。生徒の学習状況の把握を主旨として、調査全体の解答状況が分析されている。

Ⅲ 質問紙調査結果について

児童・生徒に対する質問紙調査の項目について、【基本的生活習慣の状況】【自尊感情・規範意識等について】【家庭での学習状況】【ICT 環境の活用状況】【学校での学習状況】に分類したうえで、以下、特徴的な項目を取り上げて分析する。

1 小学校 児童質問紙調査結果概要

【基本的生活習慣の状況】

(1)「朝食を毎日食べていますか」に対し、肯定的に回答した児童の割合が昨年度よりも増加し、全国平均をやや上回る結果となった。また、毎日規則正しく就寝・起床している児童の割合も依然として高く、基本的生活習慣については一定の定着がみられる。

【自尊感情・規範意識等について】

自尊感情について、(5)「自分には、よいところがあると思いますか」の肯定的割合が昨年度よりも 3.4%増加し、全国平均をやや上回っている。(7)「将来の夢や目標を持っていますか」の質問項目についても昨年度より微増していることから、児童が自らの価値や長所を肯定的に捉える傾向が強まっていることがうかがえる。また、(6)「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」(10)「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」に対して肯定的な回答の割合が高く、児童と教職員との関係性や学校での安心感は、全国水準を上回る良好な状況にあるといえる。今後も、信頼関係や安心感を土台として、児童が自らの成長を感じたり、目標を主体的に描いたりすることができる活動を充実させる必要がある。

一方で、(8)「人が困っているときは、進んで助けていますか」(9)「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」(11)「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」といった規範意識に関する質問項目において、肯定的な回答の割合が全国平均をやや下回っており、他者配慮や社会貢献意識の向上に課題が見られる。また、(43)「道徳の授業では、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいますか」という道徳科の授業についての質問項目について、肯定的回答が 86.1%と高いものの全国平均を下回っており、規範意識や道徳的な価値観を育む学習が十分でない可能性が考えられる。今後は学校教育全体を通して、普段の生活にいかされる学びとなるよう、自分事として主体的に取り組む道徳教育の充実が求められる。

【家庭での学習状況】

(17)(19)「授業時間以外の 1 日あたりの勉強時間」は、平日、休日ともに全国比較でやや短く、「全くしない」と回答した児童が平日で 8.2%、休日で 18.9%と全国平均よりも多くなっている。自発的な家庭学習や予習・復習の習慣がついていない児童が一定数いることは課題である。一方で、(20)「学習塾の先生や家庭教師の先生に教わっていますか(オンライン授業の場合も含む)」の質問項目に対し、「学校の勉強より進んだ内容

や、難しい内容を教わっている」と回答した児童の割合が全国平均を 8.8%上回っており、学習塾等へ通っていない児童と比べて学習量や学習内容の差が大きく、2極化が進んでいると考えられる。読書活動については、(24)「読書は好きですか」の肯定的回答や(21)「授業時間以外の読書時間」が全国平均を上回っており、読書習慣について定着が見られる一方で、「普段、読書を全くしない」と回答した児童も一定数おり、学校図書館を中心とした読書活動の充実を進める必要がある。

【ICT 環境の活用状況】

(28)「5年生までに受けた授業で、PC・タブレットなどの ICT 機器を、どの程度使用しましたか」に対し、「ほぼ毎日」と回答した児童の割合が 67.8%と全国平均を大きく上回っており、池田市児童の ICT 機器活用率は極めて高いといえる。また、ICT 機器の活用による学習意欲の向上や学習内容の充実について問う全ての質問項目(29-1)～(30-7)において、全国平均を上回る高い肯定的回答が示されている。特に、「情報を整理する」「友達と考えを共有したり比べたりする」等の項目において肯定的な回答が多いことから、児童が ICT 機器の活用について肯定的な意義を感じていることが明らかになった。これまで、調べ学習、個別学習、協働学習、プレゼンテーション等、あらゆる学習場面でのタブレット活用について、各校において研究が進められ、児童が効果的に ICT 機器を使う経験を積んできた成果である。今後は、ICT 機器の利点を生かしつつ、板書やノート学習など従来型の学びとのバランスを取りながら、学習内容や目的に応じて最適な方法を組み合わせることが求められる。

【学校での学習状況】

国語科、算数科、理科ともに、「(44)国語((52)算数・(60)理科)の勉強は得意ですか」「(45)国語((53)算数・(61)理科)の勉強は好きですか」に対して、肯定的な回答が全国平均を下回る結果となった。国語科については、「国語の授業の内容はよく分かりますか」及び授業における教員の指導や授業内容に関する質問項目(46)～(49)については全国平均を全て上回っており、授業内容の充実比して学習意欲が伴っていない児童が一定数いることが推察できる。算数科については、(54)「算数の授業の内容はよく分かりますか」に対しては、全国平均を上回るものの、(56)「算数の授業で学習したことを、普段の生活の中で活用できていますか」など既習事項の活用についての質問項目で肯定的回答の割合が全国平均を下回る結果となった。授業内容は理解しているが、学習したことに有用性を感じられない児童がいることが推察される。理科については、(62)「理科の授業の内容はよく分かりますか」の肯定的回答の割合が全国平均を下回り、授業の内容理解や既習事項の活用に関わる質問事項についての項目でも全国平均を下回る結果となった。観察や実験を中心に、児童の興味・関心を引き出す課題設定や、仮説を立て、結果について考察する授業展開を基本に据えるとともに、理科の学習を普段の生活につなげるような単元計画が求められる。

どの教科においても、学びの意義や価値を児童自身が理解し、学習に主体的に取り組めるような授業改善の推進や、学んだことを活用できる環境づくりが必要である。

2 中学校 生徒質問紙調査結果概要

【基本的生活習慣の状況】

(1)「朝食を毎日食べていますか」(2)「毎日同じくらいの時刻に寝ていますか」(3)「毎日、同じくらいの時刻に起きていますか」の全ての項目に対し、肯定的に回答した生徒の割合が全国平均をやや下回っている。クロス集計より、いずれの質問についても肯定的な回答をした生徒ほど平均正答率が高い傾向にあることから、生活習慣が安定している生徒ほど、集中して学習に取り組むことができていると考えられる。家庭と連携しながら、基本的生活習慣の定着に向けて、啓発を進めていく必要がある。

【自尊感情・規範意識等について】

自尊感情について、(5)「自分には、よいところがあると思いますか」に対し、肯定的に回答した生徒の割合が81.1%(全国:86.2%)となり、強肯定に限ると全国が40.7%に対し、本市では30.9%となった。また、(6)「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」に対し、強肯定の回答は本市41.8%に対し、全国46.6%となった。学校現場における生徒のよさなどを、本人や家庭に対して、積極的に伝えるなど、自尊感情を高める取組が求められる。

(9)「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対し、当てはまると強肯定で回答した生徒の割合が66.4%(全国:77.1%)で全国を下回っており、また(8)「人が困っているときは、進んで助けていますか」の強肯定で回答した生徒の割合についても、全国37.9%に対し、本市は25.8%となり、全国平均を下回っている。生徒一人ひとりがいじめを許さない態度・能力を身につけ、良好な人間関係を築けるよう、道徳教育や人権教育を、日々の教育活動全体で取り組んでいく必要がある。

【家庭での学習状況】

(17)「学校の授業時間以外に、普段(月曜日から金曜日)、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか(学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む)」(19)「土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか(学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む)」の2つの項目に対し、2時間以上と回答した生徒の割合が、全国平均を上回り、家庭での学習習慣が身につけている生徒が多いことがわかる。また、(20)「学習塾の先生や家庭教師の先生に教わっていますか」に対し、「学校の勉強より進んだ内容や、難しい内容を教わっている(オンライン授業の場合も含む)」の回答が、全国(19.1%)よりも高い割合(27.0%)となった。通塾率の高さがうかがえるとともに、高校進学に向けて高度な内容を学習するなど、進学意欲の高いことがわかる。

【ICT 環境の活用状況】

(28)「1、2年生のときに受けた授業で、PC・タブレットなどの ICT 機器を、どの程度使用しましたか」に対し、「毎日」もしくは「ほぼ毎日」と回答した生徒の割合が 74.5% (全国：53.2%) で、全国平均を 20 ポイント以上上回っている。一方で、ICT 機器の活用に関する質問で、(29-2)「あなたは自分がインターネットを使って情報を収集する(検索する、調べるなど) ができると思いますか」、(29-4)「あなたは自分が PC・タブレットなどの ICT 機器を使って学校のプレゼンテーション(発表のスライド)を作成することができると思いますか」に対しては、強い肯定の回答割合が、全国に比べてわずかに低くなっている。このことから、ICT 機器を使用しているが、スキルが身につくおらず十分に活用できていないことがうかがえる。生徒自身が ICT 機器の有用性に気づき、目的や意図に応じて、自ら進んで ICT 機器を活用することができるような授業改善が必要である。

【学校での学習状況】

「各教科((45) 国語科・(53) 数学科・(61) 理科)の勉強は好きですか」「各教科((47) 国語科・(55) 数学科・(63) 理科)で学習したことは、将来社会に出たときに役に立つと思いますか」に対して、肯定的な回答をした生徒は、いずれの教科も全国平均に比べて低い割合にある。一方で、「各教科((46) 国語科・(54) 数学科)の授業の内容はよく分かりますか」に対しての肯定的回答は、国語科、数学科が全国を上回っている。

これらのことから、国語科、数学科に関しては、学校での内容理解に関する指導については、一定の成果が見られることがわかる。しかし、学ぶ楽しさや、学ぶ意味、学ぶことが自分の人生にどうかかわるのかなどについては、実感を得ることができていないと考えられる。主体的で深い学びを実現させるためにも、導入の工夫や生活との関連付け、社会での活用場面の提示など、指導の工夫改善が求められる。

国語科、数学科の授業の内容はよく分かると回答した生徒が一定数いる一方で、「(62) 理科の授業の内容はよく分かりますか」に対して、肯定的な回答をした生徒は 68.9%と、全国平均 71.4%を下回っている。さらに、(68)「理科の授業では、観察や実験をよく行っていますか」に対して、肯定的な回答をした生徒は全国平均を上回っているものの、(69)「理科の授業では、自分の予想(仮説)をもとに観察や実験の計画を立てていますか」に対して、肯定的な回答をした生徒は全国平均を下回っている。このことから、他の教科に比べて、理科に対する苦手意識が高いことが分かる。理科の学習の充実に向けて、他者と関わりながら観察や実験を行い、気づきや発見、「分かる」や「楽しい」を味わうことができるような授業改善が必要となる。